

第八章 新たななる教育の創造をめざして

平成元年（一九八九）から現在まで

「ひのき祭（文化祭）を成功させることで、学校を変えよう」を合い言葉に、生徒会の地道な努力が積み重ねられた。そうした中、平成一〇年、TBS系テレビの人気番組「筋肉番付」の「ダルマ7」地方巡業地に本校ひのき祭が選ばれた。当日アリーナで行われた録画撮りには、地域の方々も加わり、選手の活躍はもちろん、全校一丸となつての応援は、かつてない盛り上がりみせた。

その模様は全国に放映され、「日本一の文化祭がここにあり！」（写真SBCテレビ）と伝えられた。二十一世紀、本校は再び力強く歩み始めた。



はじめに

一九八九年（平成元）、東西冷戦の象徴であったベルリンの壁が崩壊し、さらに東西ドイツの統一、ソビエト連邦解体など、戦後の米ソ超大国による世界政治の枠組みが大きくくずれた。

一方わが国はバブル経済破綻後、長引く不況に苦しみ、構造改革が叫ばれて、経済のグローバル化が進んだ。

こうした中、地球規模での環境問題も深刻化した。九二年（平成四）、ブラジルで行われた「地球サミット」では世界的規模の森林破壊と砂漠化など、深刻化する地球環境が取り上げられ、森林のもつ公益的機能及び再生産可能な資源であることなど、その重要性が確認された。

全国的な少子化と木曾郡の過疎化は、急激な生徒減をもたらした。本校では学校存続の危機としてとらえ将来像検討委員会を設け、学校のあり方と共に全国募集、くくり募集、海外研修生受け入れなどが検討され、一部ではあるが実現されようとしている。

また生徒の多様化は、女子生徒の増加と相まっていっそう進み、また郡外からの生徒は減少し、郡内出身者が増加し、地域の高校としての役割を多く担うようになった。

全国的に林業科の改編が進む中、本校ではより魅力あるコース制の改革を行い、インテリア科も再度コース制を導入した。

生徒の活躍も目覚ましく、特に生徒会では平成八年より「ひ

のき祭を成功させることで、学校を変えよう」を合い言葉に、地道な努力を重ねながら、地域を巻き込んだ数々の企画を成功させ、大きな感動を呼んだ。

部活動では、相撲部の全国大会出場、特に平成三年・一〇年には、それぞれ全国ベスト16の活躍を見せた。また柔道部も、同十二・十三年と二年連続、ソフトテニス部は六年にそれぞれ北信越大会に選手を送った。

農業クラブにおける農業鑑定競技の全国大会出場、意見発表、測量競技、プロジェクト発表等。インテリア科における各種コンクール入賞など、引き続き活発な活動となった。

毎年五月末に東京で開かれる「森林の市」参加も生徒たちに、新しい体験と大きな自信を与えた。さらにその活躍の場は大きく広がり、西表島での熱帯林研修をはじめ、フィリピン、インドネシアにおける海外植林ボランティアなど、その可能性を大きく広げた。

平成六年の林業体育特別教室棟の竣工、さらに蘇門会を中心にした九〇周年、一〇〇周年の各記念事業は、本校を力強く支えた。特に平成十三年の一〇〇周年記念事業は、本校の今後に向けて大きな礎となるものであった。

十三年一月、田中康夫知事が来校し、造林の必要性を全校生徒に訴えた。また海外研修生の受入れを表明するなど本校教育に大きな期待を寄せた。

こうして本校は、二十一世紀、新たな歩みを力強く始めた。

第一節 世界の動きを見つめて

一、環境問題の深刻化

1、環境の悪化

産業革命以来の消費活動の巨大化・繰り返されながら高度化する戦争、そして人口の爆発的增加は、二〇世紀の後半では地球レベルでの環境の変化をもたらし始めた。一九六〇年代には、それまでのゴミや大気・水質汚染に加えて、ヨーロッパ諸国の酸性雨被害がクローズアップされるようになった。

一九八〇年代に入ると、環境問題は国境を超え全地球的課題としてその解決が急務として議論されるようになってきた。こうしている間にも、地球の温暖化・重化学工業の発展と比例して吐き出される化学物質による大気汚染、熱帯林の伐採、オゾン層の破壊などの出来事が大きなニュースとして報道されるようになった。

さらに宇宙飛行士を見た「水と緑の惑星地球」「かけがえない生命をやどす地球」といった言葉に象徴されるように「この美しい地球をいつまでも美しいまま後世に」という考えは次第に全地球人の合い言葉になり、環境問題の解決にむけて全世界の世論は高まってきた。

2、環境問題の克服へ

①国連人権会議

一九七二年（昭和四七）、スウェーデンのストックホルムで、国連が主催して、環境問題に議題を限った首脳会議「国連人権会議（通称、環境サミットストックホルム会議）」が開かれた。ここでは、人間環境の有限性を認め、様々な環境問題を採用し、以後『宇宙船地球号』を合言葉に環境問題に対する気運は世界に広がっていった。

②国連環境開発会議

一九九二年（平成四）、ブラジルのリオデジャネイロで国連主催の「国連環境開発会議」が開催され、世界各国の首脳はほとんどが一堂に会する史上最大の会議となった。この会議と併行してNGO（民間による非政府組織）の会議もすすめられた。

この会議では「無限から有限へと性格を変えた地球環境に配慮した開発と、人間活動を実現させなければ人類の未来は保障されない」が世界のコンセンサスとして採択され、現実的行動計画を示したのである。その基本概念に基づき、世界の森林についての保全と持続可能な森林経営に関する最初の世界的合意である「森林に関する原則声明」及び地球環境問題に対する行

動計画をまとめた「アジェンダ21」が採択された。これ以後持続可能な森林経営に関する共通の認識が世界的に形成されるようになった。また、「気候変動枠組み条約（地球温暖化防止条約）」がほとんどの国によって署名され、地球温暖化の原因である二酸化炭素を吸収する森林の役割が注目されるようになった。

③地球温暖化防止京都会議

一九九八年（平成一〇年）には、地球温暖化防止京都会議が京都市で開催された。温暖化の原因である二酸化炭素の排出規制を、一九九〇年を基準としてどれだけ削減するかが焦点になり、わが国の調停により六パーセントと決定された。

しかし、これは各国の利害がぶつかりあうことになり、先進国間の意見の対立、さらに先進国と発展途上国との意見の不一致もあり、環境行動計画を進めるうえで、新たな南北問題として認識された。

このように地球温暖化防止の重要性は共通認識となったが、その具体的行動計画になると世界各国共通のものとして実践されるまでに至っていない現状（平成十三年七月現在）である。しかし、この会議のなかで二酸化炭素を吸収し地球の環境浄化に果たす森林の働きについて、極めて大きいことが確認されたことは意義のあることであった。

④林業専門校としての本校の役割とその意義

林業は単に木材を生産供給するだけでなく、地球環境の浄化に多大なる貢献をしていると、その重要性が世界のコンセンサスとして、今さらのように認識された。本校は林業専門校として明治三四年に開校され、以後今日までの一〇〇年間に八千有余人の有為な若者が巣立ち、その多くは全国あるいは世界各地で、前記各章で詳述したとおり、その地の林業経営に携わり、木を植え、森を育ててきた。

このことは大きくいえば、今日的な地球課題としての「環境浄化」に率先貢献して来たといえよう。そこに本校が全国に数少ない林業専門校としての存在意義があり、その果たす役割はまことに重かつ大と言わなければならない。

われらの愛唱する校歌の三番が、まさにそのことを端的に示している。

乞う見よ我等が樹芸の力 赤裸の山にも真木生い立てば
木陰に玉噴く泉も湧きて 荒ぶる川の瀬流れは和む

われら蘇門に学んだ者は、全地球の環境浄化に大いなる貢献をしていると自負するものである。

二、国のかかえる林業問題

環境面から森林の役割が重要視されながらも、わが国の林業は停滞を続けてきた。

平成時代に入つて深刻化した林業の低迷打開が林政上最大の課題になった。昭和二〇年から三〇年代に画期的に拡大した人工林が間伐期に達しながらも、経営の不採算のために放置されたものが多くなった。また木材価格の低迷・林業労働力の減少や高齢化等、林業を取り巻く状況は厳しさを増し、もはや林業は、それ自体の自助努力のみでは解決が困難な段階になってきた。

森林の衰弱、災害に弱い森林と、問題はさらに深刻かつ広域化し、国の抜本的改革が必要となった。そこで国も次のような政策を打ち出した。

木材の安定供給と林業の活性化

こうした状況を受け、国は木材を大量に、しかも安定して供給できる体制づくりをするため、平成五年（一九九三）に「流域管理システム」を確立した。

これは、森林のさまざまな機能が確保されるべき全国一五八の河川流域を基本単位として、国有林・民有林が一体となつて森林所有者から木材流通加工業者に至る林業関係者の協力体制によつて林業の活性化を目指したものである。木曾の森林は木

●コラム 森林のはたらきのお値段は 年間七五兆円？

森林の働きは木材生産ばかりでなく、きれいな水を提供したり、土砂崩れを防いだり、さらには私たちのレクレーションの場としてなど、数えきれないほどたくさんある。

このような森林のもつ公益的機能をお金に換算すると、平成十二年度では、年間七五兆円になるという。林野庁はすでに昭和四六年と平成三年に森林の公益的機能の価値評価を出している。今回は新たに水質浄化や二酸化炭素吸収の働きを評価に加えて、その総額が約七五兆円という数字を発表した。ちなみに平成十三年度の国の一般会計予算における歳出は約八五兆円である。

評価の算出方法には、ある森林のはたらきが、それと同じ程度のサービスを提供した場合にかかるお金にかえて評価する「代替法」によつておこなわれている。

しかし、森林はいくつものはたらきがオーバーラップして生み出されているので、評価額を算出するのが難しいのが事実である。

一度失つたらお金では買えないのが森林である。これからも、ますます森林の価値は高まっていくことであろう。

曾川流域としてまとめられ、効率的な森林計画がたてられた。

林業労働力の確保

平成八年（一九九六）から、林業振興策への配分を内容とする地方交付税の措置が強化され、翌年には林業労働力の確保のために「林業労働力の確保の促進に関する法律」が施行された。

森林重視の世論

一方、地球環境の悪化により、平成四年（一九九二）リオデジャネイロにおける国連環境会議（地球サミット）開催以降、環境としての森林問題は国際的な広がりをもって定着し、国内の森林重視の世論は高まりを見せ、環境資源としての森林が重要性を増してきた。

平成六年、林野庁は広く国民に森林・林業の知識を提供し、案内や野外活動のアドバイスをする森林インストラクターの資格認定制度を発足させた。それと同時に大衆に親しまれる巨木・古木の保護・樹勢回復等の必要な技術を修得したものに樹木医として資格認定する制度も定めた。

国有林野事業の経営改善

国有林野事業については、今までに幾多の経営改善をおこなってきたにもかかわらず、債務は年々累積し、平成一〇年度末には三兆八千億円にもなった。その前年に当時の内閣によ

●コラム 「ふれあいの森」本校生徒が命名

森林の公益的機能に対する期待が高まる中、わが国森林の三割を占めている国有林を管轄する林野庁は、その使命を将来にわたって果たしていくために、抜本的な経営改革をおこなった。この改革では、国有林を国民の共通財産として、国民の参加により管理経営していくことを基本にし、平成一〇年よりスタートした。

それは、名実ともに開かれた国有林とするために、ボランティア団体や地域住民が自主的な森林整備を行う場所として、最寄りの国有林の一部を提供するもので、全国一〇〇箇所程度設けるものである。

この森林の名称を全国募集したところ、三百九十二件の応募があった。審査の結果、本校から林業科三年の堀口和也・同二年の清水麻由の作品「ふれあいの森」が選ばれた。彼らは森林づくりを通じて自然や多くの人と触れ合うことのできる森林にしたいという願いを込めて作ったという。

全国の国有林で、今この名前が使われている。

る行財政改革の一環として国有林野のあり方・見なおしが取り上げられ、一〇年度には、林野庁は国有林野事業の抜本的改革をおこなった。

国有林を名実とともに「国民の森林」にするとの基本的な考
え方により、国有林の管理経営の方針を、従来の木材等の生産
に重点をおいたものから、公益的機能の維持増進を内容とする
ものへと大きく転換した。三兆八千億円の債務のうち二兆八千
億円は一般の国債にくり入れ、残りの一兆円は今後五〇年かけ
て事業収入で返済することとした。

また、林野庁の管理部と事業部を統合して国有林野部とし、
全国にある九営林局五支局を七森林管理局七分局、二二九営林
署を九八森林管理署とし、職員を一万五千人とした。事業は原
則として民間請負制とした。

中部森林管理局のスタート

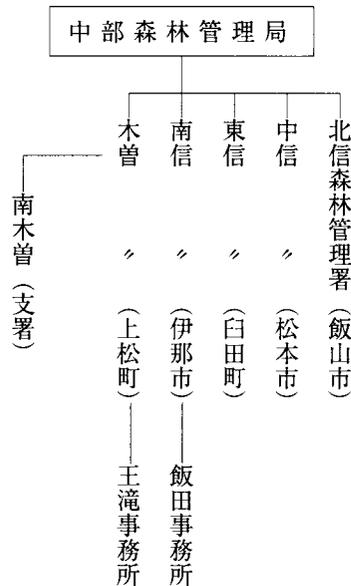
長野営林局は、中部森林管理局として新たな名称でスタート
した。管内の十三営林署を、北信・中信・東信・南信・木曾の
五森林管理署に再編し、図8-1のような計画が発表され平成
十三年八月より実施した。

さらに、福島営林署は局職員の研修地となる森林技術セン
ターとなり、大町・佐久・駒ケ根の各営林署が森林管理セン
ターとなった。各営林署は統廃合がおこなわれ、本校卒業生の
就職先が一層狭くなった。

世界的な森林・林業が見なおされる中、国の積極的な林業施
策が望まれるところである。現在の森林への国民的関心を林業
の活力回復に向け、それを実現することが、わが国林政の中心

課題であろう。

図8-1 中部森林管理局と各森林管理署

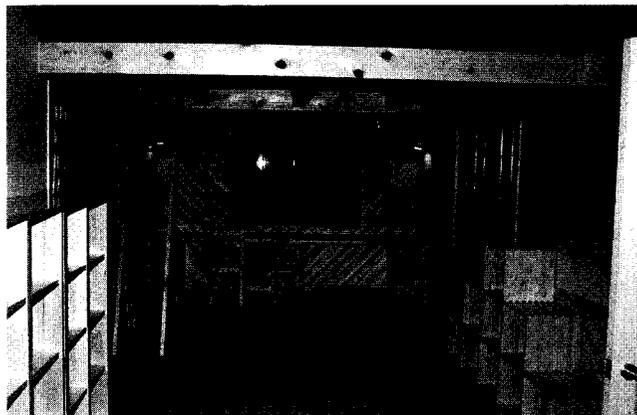


三、長野県の林業政策

カラマツ材の利用

長野県は、戦後からカラマツを中心に積極的に造林がおこな
われ、その結果四四万ヘクタールの人工林が造成された。現在、
この人工林を中心に年々蓄積が増加している。

昭和六三年の林業総合センターの発足に伴って、設備等が充
実しカラマツの構造材の実用化にむけて一層研究が進められ大
きな成果をあげた。これによって松本市のやまびこドームや長
野市のオリンピックスピードスケート会場のエムウエーブなど



写 8-1 カラマツを使った住宅

(長野県林務部林業振興課山口和茂氏提供)

に代表されるカラマツ集成材の利用へとつながった。

たおやかな森林とうるおいのある暮らし

県民の森林・林業に対するさまざまな要請に応えるため、昭和六三年（一九八八年）に「たおやかな森林とうるおいのある暮らし」を基本目標とする「長野県森林・林業長期構想」を策定し、二一世紀の森林・林業の姿を見据えながら、施策を展開してきた。

それによって多様な森林づくりの取り組みや県産材の流通拠点の整備を進め、森林組合の広域合併が進められた。木曾においては、昭和五七年に檜川、日義、木祖の各村と木曾福島町の北部四カ町村が合併して木曾森林組合が誕生した。さらに中南部にある森林組合が合併に向けて検討している。

また、平成七年には「二〇一〇年長野県森林・林業長期構想」を策定し、豊かな森林・林業をめざした総合的な施策を展開した。これによると木曾地域の森林・林業の発展方向として、カラマツ人工林の保育管理を進めること。さらに木曾ヒノキを加えた優良な地域材の生産に向け、森林整備等を進める方向が示された。

林業後継者の確保と増加

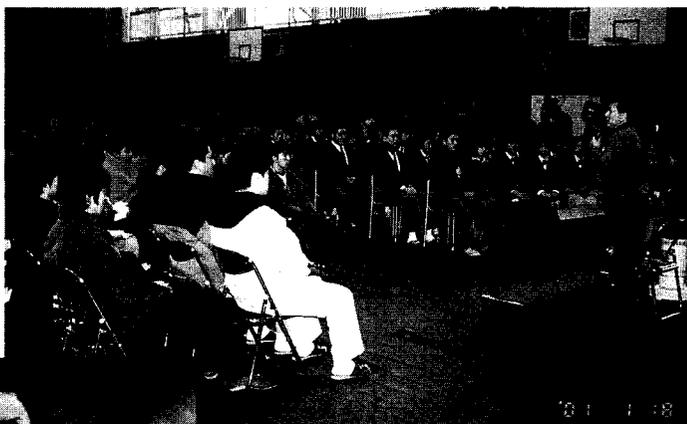
林業労働力が年々減少しつづけ、間伐の遅れなどが顕著になってきた。県は平成五年（一九九三）に「林業後継者対策推進会議」を設置した。本校の榎原満雄校長らが委員となって、時代の変化に対応した林業後継者対策のあるべき姿の検討をおこなった。また八年には全国に先駆けて、林業労働力確保支援センターを発足させて林業労働力の確保対策を進め、その結果林業への新規就業者が増加してきている。

田中知事の脱ダム宣言と緑のダムづくり

平成十二年秋に田中康夫知事が誕生し、新知事は森林の大切

さと造林事業の見直しを訴えた。

特に、翌年一月には本校を訪れて全校生徒と共に「くるま座集会」(写真8-2)を開いた。その席で知事は、先進的な西ヨーロッパの例を引きながら、緑の大切さ、造林の必要性を生徒に強く訴えた。また生徒の「本校の将来はどうなるか」との



写8-2 田中知事は本校生徒を前に森林の大切さを訴え、本校教育に大きな期待を寄せた



写8-3 知事から贈られたサイン入りの色紙。手にしているのは生徒会長の内山ちひろ(3年)

質問に答え、アジアからの林業研修生の受入れを表明した。

その後、全国に先がけて「脱ダム宣言」を発表して、緑のダムの構築を重要な政策課題として取り上げた。

四、生徒急減期と生徒の多様化

1、深刻な生徒急減期

高校の統合と学級減

戦後の経済高度成長以来とどまることのない人口減少は、少子化の傾向も加え、特に木曾郡の過疎化は急激な生徒減を引きおこした。(第六章図6-1参照)これに対して県教育委員会 は、昭和五七年(一九八二)四月、木曾東・西高校の統合、さらに普通科の学級減によって対応した(図8-2参照)。そのため第十通学区(木曾郡)における普通科と専門科(職業科)の割合が他地区に比べ、専門科が多くなるという状況になった(図8-3参照)。

学校存続の危機

さらに県は、平成七年度から、高校入試にパーセント条項を設け、一定数郡外の普通科へ入学できることとした。

このような中で、郡内の高校入学対象者は急激に減っていくことになった。図8-4のように平成二四年(二〇一二)に

図8-2 第10通学区（木曾郡）全日制高校募集定員と学級数の変化

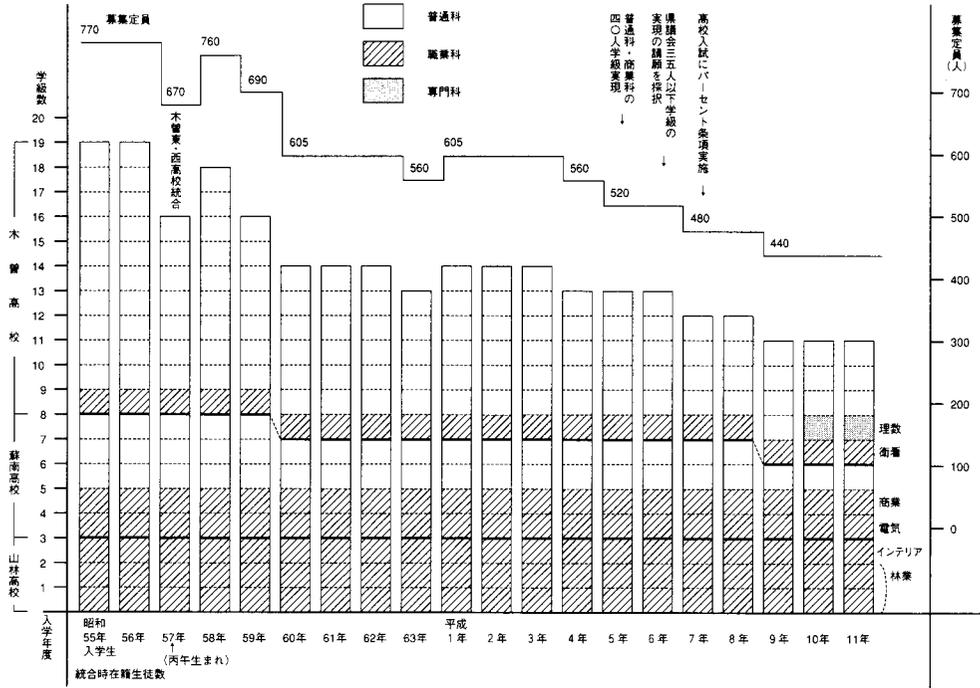


図8-4 今後の入学対象者数（第10通学区）

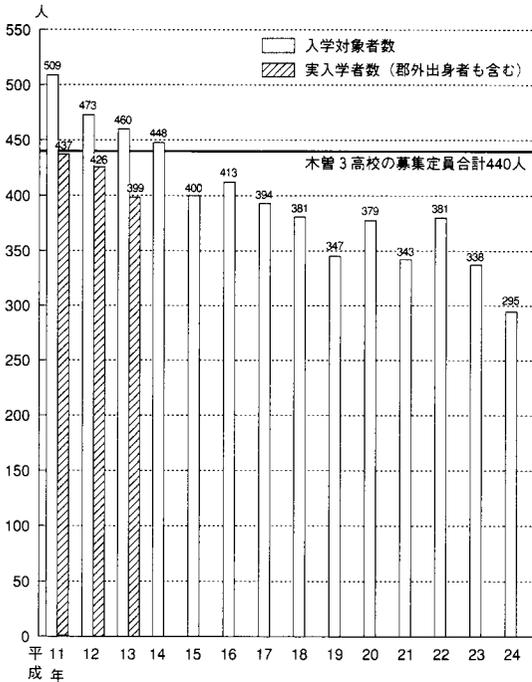
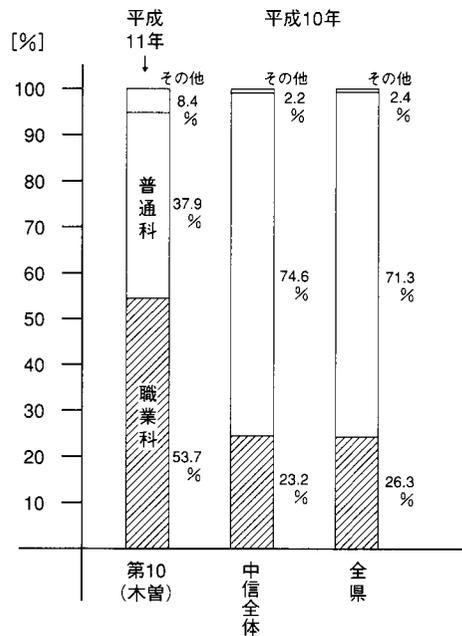


図8-3 普・職比の割合



は、郡内における中学三年生の数は三〇〇人を割り、本校を含む郡内の三高校は、学校存続の危機にみまわれることになった。

様々なニーズ

このような事態の中で、本校では平成三年十一月には将来像検討委員会（第二節）が設けられ検討が進められた。

また時代の多様化を背景に、郡内中学生の高校進学希望者は、ほぼ全員が入学できることになり、本校へも様々な生徒が入学するようになった。そのため生徒の多様化も一層進んだ。したがって目的意識の高い生徒と、そうでない生徒との差が大きくなった。

さらに本校を特色づけていた県・郡外生の入学は著しく減り、約九割を木曾郡内の生徒が占めることになった。こうして本校は、地域の高校としての特色が濃くなり、さまざまな教育ニーズに因應の必要が出てきた。

将来像検討委員会では、十二年七月、郡内の中学三年生全員に「山林高校でどのようなことが学べるとよいと思いますか」というアンケート調査をした。結果は図8-5である。

これをもとに、目下コース制の改革及び新教育課程の編成に取組んでいる。また一番要望の強いパソコン教育については、すでに本校入学希望者が、その教育を交替で受けられる体制になっている。

図8-5 中学生が本校の教育内容に期待するもの(アンケート結果) 将来像検討委員会
アンケート実施日 平成12年7月1日~15日 対象 木曾郡内11中学 3年生全員 460人(1人5個まで複数回答)
回収数 430人 回収率 93.5%

質問項目	中学校	榑川	木祖	日義	福島	開田	三岳	王滝	上松	大桑	南木曾	山口	合計
植林や森作りなどの森林科学系の学習及び実習	13	9	5	22	4	1	1	23	8	14	16	116	
測量・設計・製図などの土木工学系の学習及び実習	12	8	0	22	6	7	1	18	15	20	10	119	
自然保護や環境問題などの学習及び実験実習	17	12	14	19	6	1	4	14	10	21	18	136	
パソコン、情報処理、簿記などの学習及び実習	29	27	20	42	13	10	11	36	38	38	24	288	
製図・木材加工・建築などの学習及び実習	12	8	5	24	5	5	5	11	12	20	16	123	
デザイン・美術などの学習及び実習	15	17	18	28	8	8	7	20	34	40	14	209	
幼児や高齢者のための福祉関係の学習及び実習	14	11	12	13	1	7	5	16	10	13	9	111	
英語や国際交流を主とした国際関係の学習及び実習	10	19	15	16	4	5	7	16	21	19	11	143	
木曾の歴史・文学や地域おこしなど郷土のことがわかる学習	2	6	4	6	2	0	1	8	3	9	4	45	
英語・数学・国語・社会・理科などの普通科目の時間を多くし、普通科にちかい学習	20	13	22	25	6	8	5	25	14	15	9	162	
大学などへの進学を専門にした特別な学習	11	11	8	15	5	6	5	14	13	17	12	117	
森作り・測量・情報処理・環境・木材加工・デザインなど幅広い学習及び実習	18	14	7	31	7	5	5	27	16	23	18	171	
回答者数	46	39	35	67	16	14	16	58	47	56	36	430	

第二節 本校の将来像検討

一、将来像検討委員会の設置

生徒急減期を控えた平成三年（一九九二）九月、職員会で、生徒急減期に向けて長期的な展望について、早急に検討する必要性を訴える意見が出され、校内で検討の結果、次のような認識で一致した。

- ①木曾地区（第一〇通学区）における急減期は、学校存廃の危機であること。
- ②本地区における普通科と職業科の募集定員の割合をみると他地区と異なり、職業科の比率が高いことへの批判がある。
- ③本校の有用性を強くアピールし、本校が地元地区及び産業界に必要な学校であるとの認識を持ってもらうことが必要であること。
- ④特に林業科は、その必要性を訴え、広い視野と洞察に基づく長期的な展望を示すことが必要であること。

同年十月三〇日の職員会で、学校将来像検討委員会の設置が決定され、さらに次のような委員会の活動方向も示された。

- ①本校が、社会（地域、県、国）にとって必要な学校であること（存在意義）をアピールする。
- ②地域から評価される学校作りに取り組む。
- ③林業と林業教育、インテリア教育の展望を明らかにしていく。

④林業教育が現教育制度の枠内でどのような展望が持てるか検討する。

⑤当面できることから実行していく。

- ・地域の行政担当者、有識者と学校職員との懇談会をもつ。
- ・産業教育振興会との連携による講演会等を開く。

- ・明るい、希望につながる進路決定が保障できる体制作り。
- ・部活動の活性化、朝日森林文化賞への応募

・生徒募集定数の検討等

早速、教頭を含む五人の委員が選出され、竹松杉人教頭を委員長に互選して委員会が発足し、活動を始めた。

二、将来像検討委員会の活動

発足した委員会は、翌四年、町議会の桜井昭雄議長、ミクロ技研株木曾福島工場の田中秀雄工場長、中村木材株中村昭重社長を招き、学校職員との懇談会を開催した。さらに蘇門会、PTA役員との懇談会も開催された。また六年には、塚原青雲高校の塚田哲丸先生の「廃校の危機に抗して」の講演会を開催し、

学校存続の方途を探った。

しかし、この問題の大きさ困難さ、県立高校としての厳しい制約など、委員会として具体的な提案をなすまでには、多くの試行錯誤と時間を要した。次に委員会の主な活動をあげる。

1、本校のPR活動

木曾山林高校ニュースの発行

先ず本校の様子を、地域、特に中学生に知ってもらう主旨で、平成四年から「木曾山林高校ニュース」(写8-4)が、試みに発行され郡内十一中学校に配付された。内容は、B4版一枚に学校行事や、中学卒業後の本校における生徒の活躍ぶりを伝えるもので、不定期に出されが、平成十一年度末までに十六号を数え、好評であった。さらに組織的発行にするため、教務の分掌として位置付けられた。

学校紹介ビデオの作成

また文字ばかりでなく、映像によるPRも効果的であるとのことから、七年、九〇周年記念特別教育基金の利子を使って学校紹介ビデオ(写8-5)を作成し、県下中学校に配付した。

職員による中学校訪問

八年には中学校の進路担当者への直接説明のために、郡内の

十一中学校をはじめ、郡外の二七中学校、岐阜県の三中学校、合計四一校の訪問をした。さらに生徒会や学校の行事を積極的に報道機関に事前連絡して、新聞掲載やテレビ放映をお願いした。

2、全国から生徒募集の計画

林業科の大幅な欠員

平成九年(一九九七)度、林業科は入学定員八〇名に対して、



写8-4 木曾山林高校ニュース



写8-5 学校紹介ビデオ
県下の中学校等に送られた

五七名しか入学者がなく、二三名の欠員を生じた。このことは本校のみならず、県下林業関係者にも大きな衝撃を与えた。同年六月県議会では、森司郎議員から、林業教育の活性化の方途に加えて、本校の林業科について全国募集をしたらどうか、との質問が出された。それに対して教育長は、本校の伝統、林業科の将来展望、学校や地域の要望をふまえて研究したい旨の答弁をした。

全国募集への取り組み

これをきっかけに本委員会では、全国募集に取り組んだ。一番の問題は、受け入れ態勢と全国募集に足る魅力ある学校作り

であった。そこで、同年九月、舎委員会と合同で飯山南高校、新潟県立水産高校の宿舍指導を中心に視察をした。さらに全国募集を行っている高知県立大正高校、同海洋高校等を委員が視察し、検討の結果、委員会案を次のように作成し、一〇月八日、職員会で決定された。

〔全国募集について〕

生徒急減期を踏まえ、また本校の将来的発展を期して、平成一〇年度の入学生から、全国募集をする。それに伴い望岳寮の改善をはじめ校内の受け入れ準備を平行して進める。

①受け入れ生徒について

目的意識をきちんと持ち、本校で三年間の学習及び生活に耐え、その成果を期待できるもの。特に寮の規則及びその指導に従うことができるもの。

②受け入れ態勢について

望岳寮の改善を図るための寮改革委員会（仮称）を設置する。また、受け入れの為の事務手続、事前面接等の取り組み態勢を作る。

この決定は、学校長から県教育委員会へあげられた。それを受け、県教委は全国にない本校独自の特色ある学校作りを指示した。

環境コースの新設

そこで本校独自の教育をめざして検討を開始した。その結果、問題の緊急性及び可能性をふまえて林業科のコース制の検討に入った。その結果、将来を展望できるもの、中学生にわかりやすいもの、他県にない創造的なものをめざして、林業科の三コース（森林科学・土木工学・情報流通）に新たに「環境コース」を設置した。これは早速平成十一年四月入学生から実施された。

しかしながら、本校の全国募集は、いまだ実現に至っていない。

3、くくり募集に向けて

平成十一年（一九九九）、新たに赴任した宮崎胤門校長は、本校の置かれた深刻な事態を重く見て、同年八月末、実現可能な方法として、林業科・インテリア科の「くくり募集」の検討を、将来像検討委員会へ提案した。

くくり募集は、入学する時点では今までのように林業科・インテリア科に分けず、一括入学させ、二年に進級する時、コース選択により分かれ、卒業時に専門科目の取得単位数によって卒業する科を決定するものである。

可能ならば、平成十三年度より実施することを前提に、同年十二月末、全職員による討論会。翌十二年二月、静岡県立引佐

高校、天竜林業高校などの視察。くくり募集をしたときの教育課程の具体的シミュレーションなどを経て、同年四月、委員会としてはくくり募集を林業科、インテリア科に提案し、その同意のもと五月三十一日、職員会議に次のような提案をし、決定を見た。

「くくり募集について」

提案内容

- ①平成十三年度より、林業科・インテリア科のくくり募集を行う。
- ②上記の件を県教委へ申請し、認可を得てその準備を開始する。
- ③県教委の対応によっては、再検討もあり得る。

提案理由

- ①生徒急減期の中、本校の募集定員（三学級）を、できるだけ維持し、本校の存続をはかるため。
- ②林業科・インテリア科の大学科の枠をこえ、その良さの再構築をはかるため。
- ③時代の要請、生徒の多様化に本校としても応えていくため。
- ④地域高校として多様な生徒が入学してくる中、全校での指導態勢を作りやすくするため。

⑤従来、中学校側から、本校の教育内容がわかりにくいとの批判や、誤解されることがあったが、くくり募集はそれに

応えることができる。その他。

さらに、その実施に当たっては、引き続き次のことが必要である、とした。

- ① 本校独自の特色をだし、目玉になる魅力あるコースの検討及び設定。
- ② くくり募集を形の上だけでなく、実質を伴うものにするために林業科・インテリア科のみならず普通科も含めた、全校あげての協力態勢作り。
- ③ 三〇人学級実現のための運動の必要性。

さらに本校の林業科とインテリア科は、今は大学科間に分けられているが、元々は兄弟の関係にある学科であることを添えて、橋詰政勝校長から県教委へ申請書が出された。しかし県教委の回答は、大学科間であっても専門科目の相互乗り入れは可能であるが、「くくり募集」については、その検討時間がないため認められない、というものであった。

翌十三年度、このくくり募集の申請は、再度県教委へ提出された。

4、アジアからの研修生受入れ

県教委は、田中知事の「アジアからの研修生受入れ」表明を受け、平成十三年度この事業計画を調査・検討した。その結果、

翌十四年度より中国、ネパールなどからの研修生を、県下の四農業高校で受け入れることを決定した。

それを受け、来年度から、本校へも数名の林業を学ぶ研修生が、約一カ年の予定で来校する予定となった。

いよいよ本校も世界の森林・林業教育に貢献できることになった。新しい本校の姿を示すものであろう。

第三節 本校の新たな改革

一、コース制の改革

1、林業科二学級堅持

①改編相次ぐ林業科

全国に、林業科をおく高校が昭和四五年には、九〇校あったが、平成十三年には二十数校に減った。その多くは、他学科との統合、関連性のある他の学科への転科、廃科などの学科改編にともなうものであった。その背景には、産業としての林業の不振、中学生の普通科志向などがあげられる。

長野県内においても例外でなく、戦後八校あった（第五章）が、現在は、本校と下高井農林高校の二校のみである。

こうした状況下で本校が林業科を主に、なおかつ二学級をもつ学校として、一〇〇年を迎えることは、全国的にみても、やはり特筆すべきことであろう。

②コース制の改革

全国的な学科改編の流れのなかで、あえて本校は逆に数少な

い林業科としての存在価値を見出だすべく、改革を進めた。

即ち従来の山を守り育てる生産的林業に重点をおきつつ、環境面より森林をとらえるような内容を盛り込んで、大学進学を視野に入れた、新しい時代に対応した幅広い教育課程を編成した。

そして従来の「経営」「土木」「情報」の三コース制（二年時から）を基本的には堅持しながら、社会や地域の要望・多様な進路希望への対応等により、内容の見直しをはかり、次の三コースを導入した。

森林科学コース（四〇名）

森林を科学的にとらえ、森林の育成・経営からその資源の活用面をより明確化し、林業・森林を一般的に学習して、公務員・林業関連会社への就職、大学への進学をめざすこととした。

従来の科目「育林」「林業経営」「測量」をもとに、新科目として「環境科学」「森林資源」を設置した。これは森林の多面的機能を実験・実習を通して学び、環境を守り育てることである。

三年時では、二つのインターコース *a* および *b* を設け、*a* コースは大学・公務員系、*b* コースは専門技術系とした。特に *a* コースは、進学向きの教科内容を大幅に取り入れた。

土木工学コース（二〇名）

一般的な林業知識の上に、測量・力学・砂防等の知識技術の取得をめざすものであり、土木関連企業への有為な人材の育成をねらうものである。

従来の科目「測量」をもとに、新設科目「造園」「環境保全」「設計製図」を設置し、森林環境・都市計画・力学・製図等を学習し、一貫した土木技術を身につけることとした。地域から大きな期待が寄せられている。

情報流通コース（二〇名）

一貫した情報処理学習に加えて、商業的簿記・製図に習熟させ、従来からの加工生産の内容を多くし、流通面を重視して女子生徒の受入れをはかるものである。

従来の科目「情報処理」「製図」をもとに、新設科目「簿記会計」「マーケティング」を設置し、簿記や流通の仕組みを学習し、コンピューターに習熟した事務全般の人材養成をめざしたものである。

これらの改革は、よりきめ細かく、生徒のニーズに応えながら、本校の伝統である林業教育を発展させようというものであった。また前述の環境コースは平成十一年度より設置した。

2、インテリア科

①コース制の復活

インテリア科ではコース制を廃止してから十年（教育行政の指導下に変更したことはいえ）、その間生徒たちの職業観の変化があった。また教科選択制に重点をおき基礎・基本から応用まで幅広く学習するため時間数の不足などが問題となっていた。それを補うためにも、コース制を敷いて、やや狭くはなるが、深く学習した方が、今までより興味や関心度が高まるものと考えた。

平成六年度からの新教育課程に合わせて、二年時より生産工学及び情報デザインのコース制を、再度採用することにした。

生産工学コース

生産工学コースは、生産技術を主体とし、木材加工、インテリア関係施工、NC機械加工、家具製図、建築製図、計画、エレメント生産など、二年生十三時間、三年生十三時間、十九時間実施し、理論と実践を行う。

進路先は、建築系の大学・専門学校・公務員及び家具製造、内装、施工、建築関連会社へ就職して、中堅の技術者を目指す。

情報デザインコース

情報デザインコースは、コンピュータグラフィックやイラスト、デザインの基礎、インテリアデザイン、インテリアパース、家具デザインなどのデザイン技術の修得。計画や製図にも重きを置く学習などである。

卒業後は、インテリアデザイン関係、インテリアコーディネーター、プランナー等の将来への目標を定めている。また進学については、インテリア関係、住居関係、建築関係の大学、短大、専門学校をめざす。

二十一世紀はインテリアの時代

生産工学コースは、従来の加工コースを受け継ぎ、発展させようというものであり、さらに情報デザインコースにおけるデザイン教育の充実は、生徒たちの新たな可能性を引き出すものであった。

二十一世紀はインテリアの時代といわれ、大量生産から多品種少量生産、住空間の人間性・個性重視へと変化していく時代に沿う本校の改革である。

3、制服の刷新

①女子の増加と制服の刷新

昭和六一年から林業科にも女子が入学し、六二年度には全校で女子は八〇名になった。こうした中で女子の制服検討が始められ、六三年度入学生から、それまでの濃紺のブレザータイプに襞数^{ひだ}指定のスカートから新しい制服に刷新された。

新しい女子の制服は、次のようである。

上着は明るい紺色、ダブルのブレザー（2ボタン）。

スカートは、グレンチェックの八本襷。ベストはスカートと同色（2ボタン）。

丸襟のブラウス（白色）・アスコットタイ（緑色）

生徒にはおおむね好評で、女子生徒の新しい制服に新鮮な気持ちを感じた人が多かった。



写8-6 女子の新しい制服を着た荻村美樹生徒会長（PTA会報『山を愛す』34号）

②続いて男子の制服もブレザータイプへ

女子の制服刷新をうけ、九ヵ月遅れて平成元年一月、一年生男子から新しい制服にか変わった。それまでの黒の詰め襟、金ボタンのいわゆる学生服タイプから、ブレザータイプに変更された。

男女とも学年進行で制服刷新が進み、平成二年度には全校生徒がブレザータイプの新しい制服にそろい、翌年の創立九〇周年記念式典に集まった卒業生たちを驚かせた。

4、大先輩の足跡を訪ねた沖縄への修学旅行

昭和五〇年代から続いていた広島への修学旅行はしばらくして九州方面へ変更され、数年が経った。

沖縄近代林業の父 園原咲也の足跡調査

そうした中で、本校創立一〇〇周年が数年後に迫った平成七年一月、第一回卒業生の園原咲也（第一章参照）が一生を捧げた沖縄へ、彼の足跡調査に、四名の職員が出かけた。

園原は大正元年に沖縄に渡り、県職員や教員として活躍した。特に戦後は北部農林高校で教壇に立ち、多くの林業後継者を育てるとともに、戦火に荒れ果てた沖縄を緑の島にするための、大きな原動力となった。特に同校では「学校の宝」として深く尊敬されていた。そのことは調査に出かけた職員が強く感じ、後輩に当る本校生徒にも、その偉大さをぜひ知ってほしいと考えた。

園原先輩の足跡を後輩に見せたい

それを受けて七年度入学生担当の学年会は、二学年で実施する修学旅行を沖縄に決定した。しかし、当時修学旅行については、船舶や航空機の利用は原則として認めない、と言うのが県教育委員会の方針であった。

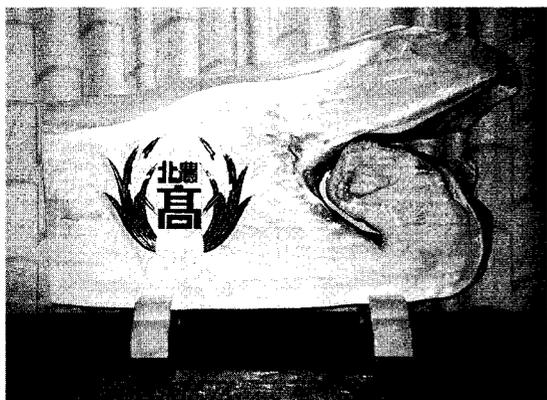
そこで卒業生の足跡を訪ね、沖縄の高校生との交流をしようと

いう、新しい企画を示し、特別許可を願い出て、承認を得ることができた。このようなことは他校にも例がなく、信濃毎日新聞でも取り上げられ注目された。

本校として初めての試みであったので、平成八年三月には該当学年の職員六名で、沖縄へ下見にも出かけて綿密な計画を立てた。

北部農林高校の校章楯の製作

また訪問先となった北部農林高校へ、園原先輩を暖かく見守ってくれた感謝の気持ちと、交流の記念に同校の校章楯を製



写8-7 北部農林高校に贈られた校章楯
(原喜仁・63回・蔵)

作して贈ることになった。そこで原昭元PTA会長（57回）の協力をいただいで、樹齡二百年の天然木曾ひのき（六〇〇ミリ×九〇〇ミリ）に校章を彫り込み着色した。楯の裏面には今井弘幸（43回）にお願いし記念の文字を記した。前記のお二方や校内職員の努力ですばらしいものができあがった。旅行直前の保護者会でも披露され好評であった。（写8-7）

大先輩の愛した沖繩の地に

平成八年十一月十二日十時三十分、生徒百十一名・引率職員六名は台風の影響が心配される中、バスで母校を後にし、名古屋空港に向かった。十七時三十分、園原が沖繩に渡りヤンバルの山の中で植林の指導を初めてから八十年後、その後輩たちが大先輩の愛した沖繩に降り立った。

感激と母校への誇り

その日は那覇市内のホテルに宿泊した。翌日、東南植物園などの見学をしながら北上して、北部農林高校へ到着した。体育館には歓迎の横断幕が張られ、安村校長や生徒会長から歓迎の挨拶をいただいた。続いて園原の直弟子である照屋照和元校長から在りし日の園原について、講話をいただいた。その後、本校生徒代表のお礼の挨拶と、用意した校章楯の贈呈をした。歓迎会終了後は実習で作ったパインジュースや黒糖をご馳走になった。



写8-8 照屋照和先生の講話を前に。北部農林高校にて（原喜仁蔵）

さらに園原が植栽した樹木や学校内を見学して、学校を後にした。生徒たちは、沖繩の地で林業一筋に一生を尽くした大先輩の偉大さを知り、また沖繩の方々が亡くなってすでに十五年経った今でも大切に思っていてくれることに、感激し、母校への誇りを感じていた。

この日は本部^{もとぶ}の海洋博会場を見学して終えた。三日目はひめゆりの塔・平和記念館・ガラビ壕などの戦跡を見学し、悲惨な戦争、沖繩の人々や園原の苦勞を肌で感じ取ることができた。四日目は那覇市内の見学をして、昼頃名古屋に向けて飛び立つ

た。

わずか四日間の滞在ではあったが沖縄のことや、先輩のことを学ぶことができた本校ならではの有意義な修学旅行となった。これ以来沖縄への修学旅行が現在まで続き、また北部農林高校との交流も続いている。

5、全国高等学校林業教育研究協議会の開催

全国林研と各地区林研

昭和三七年（一九六二）、全国高等学校林業教育研究協議会（略称、全国林研）は、林業科を取り巻く諸課題の情報交換や研究協議をおこなうため発足した。全国林研は参加校の持ちまわりで、夏休みを中心に年一回の総会を行った。この頃より関東・東北・九州などでは、各地区ごとに林業教育研究会が行われはじめていた。

四〇年に関東林業教育研究協議会が発足し、全国林研とともに総会を行った。本校は同会に所属し、常任理事校として、その運営に携わった。

本校を会場に第十二回全国林研

昭和四八年八月七・八日にわたって、第十二回全国林業教育研究会・第九回関東林業教育研究会が本校を会場にして行われ、「林業科における自然保護教育のすすめ方」「林業科目の実験

実習データ処理について」をテーマに研究協議会が行われた。

昭和五八年八月八・九日にわたって、上松町の「上松国民宿舎」を会場に、全国林研が開催された。そして「林業科における進路の実態とその対策」をテーマに研究協議が行われた。

この頃は全国的に林業科の志願者が減少傾向にあつて、しかも今後の林業・経済状況の厳しさが予想される中、進路指導はどうあるべきか、との認識の下に熱心に意見がかわされた。

その時の参加者への記念品は、森林鉄道のレールを輪切りにした文鎮で、それに林産コースの生徒が作った和紙を包み紙にしたもので大変好評であった。

その後、全国的に林業の不振や生徒数の減少が続き、普通科志向の強い中にあつて、かつてないほど林業科を取り巻く状況は厳しくなった。こうした中で、前述のように学科改編が進められて、林業科が減少してきた。

全国林研と関東林研の組織の一本化

平成元年（一九八九）に全国林研と関東林研の組織の一本化がはかられ、全国高等学校林業教育研究協議会が誕生した。

新林業棟で再び全国林研開催

六年に、第三三回全国高等学校林業教育研究協議会が、本校を会場に開催された。北は秋田県から南は大分県まで、全国から一三〇名の林業関係職員の参加があり、「魅力ある授業を展

開するにはどうしたらよいか」というテーマで研究協議会が行われた。各校とも林業教育の存在意義を見出すべく、その実践報告がされた。

元林野庁長官の小澤普照氏の記念講演

また元林野庁長官の小澤普照氏（現、海外林業コンサルタン卜協会理事長）より「林業教育に期待するもの」と題して記念講演をいただいた（写8-10）。氏は「二一世紀は環境資源として林業・森林が見なおされる時代になる。先生方が林業に対して夢を語れるようになってもらいたい」と参加者にエールを送られた。

また氏は本校の標本室を視察され、標本が充実していることを賞賛された。なお講演を記念して、先生と生徒が一体となって林業を学び優秀な人材に育って欲しいことを願って「啐啄同時」と揮毫していただいた。現在林業科標本室前にその扁額（写8-9）がある。

本校生徒のために

氏はこの講演をきっかけに、本校に対して特段のご高配をいただくことになった。東京で開かれる「森林の市」への参加（後述）の機会や、本校の特別講師となつて、平成一〇年の開校記念日には全校生徒に講演をいただいた。

また、この全国林研の林野庁の窓口である研究普及課長補佐



写8-9 小澤普照元林野庁長官の揮毫



写8-10 小澤元長官の講演（平成6年）

の長縄肇氏（元、林野庁監査官）には、後述するように本校生徒が林野庁長官や文部省職業教育課長との懇談ができるように設定していただくなど大変お世話になっている。

6、箕輪教授（東京大学）の特別授業

林業を学ぶ本校生徒のために、平成九年十一月十九日、東京大学大学院教授の箕輪光博氏が特別講師として来校し、林業科

森林科学コースの二・三年生を対象に二時間の授業（写8-11）を行った。

箕輪教授は森林・林業の大切さ、複眼的なものの見方や循環型社会の必要性をOHPやビデオを使いながら分かりやすく講義され、生徒たちに変好好評であった。



写8-11 箕輪教授のOHPを使っのわかりやすい授業

7、第二九回全国高等学校インテリア科教育研究大会開催

平成四年七月二十八日（火）・二十九日（水）、本校当番校にて、第二九回全国高等学校インテリア科教育研究大会が、松本市にあるみやま荘を会場として開催された。

参加者は、文部省産業教育専門官及川雅勝先生、来賓十一名、賛助会員十八社二十七名、全国から会員三八校五八名、計九七名の多数であった。

①大会目的

高等学校インテリア科教育推進のため全国のインテリア科及びこれに準ずる設置校の関係職員が一堂に会し、インテリア科教育の果たす役割と、これに携わるものとしての専門性を向上させると共に、今後のインテリア科教育の発展、充実を図る。

②主催 全国高等学校インテリア科教育研究会

関東甲信越地区高等学校インテリア科教育研究会

③共催 長野県教育委員会

④後援 全国工業高等学校長協会・長野県産業教育振興会

長野県工業教育研究会・長野県家具工業組合

⑤参加者

全国高等学校インテリア科教育研究会加盟校の校長・
会員及び賛助会員

⑥大会内容

七月二七日(月)

役員会 インテリア科推進委員会・新旧常任理事会

第一回常任理事会

七月二八日(火)

・開会行事

開会のことば

あいさつ 全国高等学校インテリア科教育研究会会長

(宮崎県立宮崎工業高等学校長) 小野正二

同 当番校(長野県木曾山林高等学校長) 柗原満雄

祝 辞 文部省初等中等局職業教育課産業教育専門官

及川雅勝

同 長野県教育委員会教育次長 田村治夫

同 長野県産業教育振興会会長 宮沢 脩

同 長野県工業教育研究会会長 中島道遥

同 長野県家具工業組合副理事長 小林一茂

来賓紹介

・総会

・講演「家具と建築」 東京芸術大学名誉教授 奥村昭雄

・研究発表Ⅰ「積層成形材を使った家具」

岡山県立高梁工業高等学校 中田知良

研究発表Ⅱ「課題研究の実践」

長崎県立長崎工業高等学校 野上信孝

・賛助会員紹介

・教育懇談会

七月二九日(水)

・研究発表Ⅲ「インテリア製図の合理的授業について」

宮城県立宮城工業高等学校 大出光一

研究発表Ⅳ「課題研究Ⅱ産業現場における実習への取り組み」

岐阜県立高山工業高等学校 池之篤 章

写8-12 研究大会のレジメ



写8-13 インテリア科教育研究大会 (柿崎庫之助教諭蔵)



- ・ 研究協議
- ・ 講評 長野県教育委員会高校教育課指導主事 母袋幹佳
- ・ 閉会行事
- ・ 教育視察 国宝松本城・民族資料館（解散）

8、産業教育新技術等講習会

平成八年度文部省主催による産業教育新技術等講習会を新装なった長野県総合教育センターの施設を活用して行った。

目的 高等学校において職業に関する教科を担当する教育等の研修を関係団体等に委託し、当該教育に対して、社会の変化に対応した新しい教科、科目に必要な知識と技術を体得し、その資質の向上を計り、高等学校における産業教育の改善充実に資する。

- 主催** 文部省
- 後援** 全国高等学校インテリア科教育研究会・長野県教育委員会
員会教学指導課・長野県総合教育センター
- 協力校** 関東甲信越地区高等学校インテリア教育研究会
- 当番校** 木曾山林高等学校インテリア科
- 参加者** 各都道府県教育委員会の推薦者十五名、実行委員六名、事務局七名、合計二八名
- 産業教育新技術講習会をどのような内容にすべきか検討した

結果、情報産業の基礎と応用を中心した講習会を行うこととし、長野県総合教育センター産業教育部の協力を得て、五日間の講習会を開催した。

文部省主催平成八年度産業教育新技術講習会日程と内容

期間 八月五日（月）～九日（金）

八月五日（月）

・ 開校式（九時三〇分～一〇時）

主催者挨拶 文部省初等中等局職業教育課

教科調査官 佐藤義雄先生

挨拶 長野県教育委員会教学指導課 小出邦宜主事

同 長野県総合教育センター所長 木下俊佐先生

同 全国高等学校インテリア科教育研究会会長

新技術講習会実施委員長 水崎雅臣先生

（兵庫県神戸市立神戸工業高等学校長）

同 当番校 木曾山林高等学校長 一條春雄先生

・ 施設等見学

・ 実技 CADスーパの部品配置による住宅平面図の作成

八月六日（火）

・ 実技 フォトショップによる二次元構成（終日）

八月七日（水）

・ 3Dスタジオによる三次元実習、I・II（終日）

八月八日（木）

- ・産業視察木曾くらしの工芸館、漆器工場等見学（午前）
- ・講演「インターネットの現状」（午後）
- ・インターネットW3 ホームページデザイン I
- 八月九日（金）
- ・インターネットW3 ホームページデザイン II
- ・閉校式（終了証書授与）

第四節 生徒たちの活躍

一、地域に活躍する生徒たち

1、演習林が木曾景観賞を受賞

平成二年（一九九〇）長野県と木曾郡広域行政事務組合は地域活性化のため、木曾地域広域開発ビジョンを共同プランとして起こした。そしてそれを達成するために住民参加と地域のリーダー養成を進めながら、二〇一〇年を目標に知的創造型圏域の形成のための五つの具体的目標を掲げた。

その一つのプロジェクト「木曾一村一美運動」は、平成四年より木曾景観賞の創設から始まった。その第一回の栄誉に本校の演習林第四林班口小班の1（巻頭グラビア）が選ばれた。

この林分は八〇年生のヒノキとサワラの混交林で、長野県有林の中では最も古い人工林であり、木曾の民有林でもこれだけの広面積の人工林は他にない。これらはすべて本校生徒達の手になるもので、先輩から後輩へ八〇年にわたり受け継がれたものである。



写 8-14 受賞した木曾景観賞

2、森林（親林）教室 生徒が先生

平成七年（一九九五）林業科では演習林の開放と学校の学習内容の公開を通じ、森林・林業・林産業への理解をはかることを目的に森林（親林）教室を開催した。この教室は生徒たちが指導者となって地域の方々に林業を教えるもので、企画の永続性と生徒の成長を期して、林業（農業）クラブの生徒を中心に活動を始めた。

そして「木曾山林高校生による森林（親林）教室」と銘打って、第一回の開催を夏休みの一日に設定した。参加者は一〇名



写 8-15 第1回森林（親林）教室に参加した皆さん



写 8-16 自動枝打機の操作を指導する生徒と参加者

であったが、内容は測量、自動枝打ち機、集材、講演会、樹木観察、竹トンボ作りと、盛り沢山で、参加者は「山林の生徒さんはどこの場所でも自信を持って指導してくれた。」と感想を

もらすなど充実した一日を過ごした。生徒により企画運営されるこうした教室は全国でも例がなく、本校の画期的な取り組みが改めて注目された。(写8-15・16)

翌年からは内容を少しずつ検討・改善しながら、実施されている。平成九年には全県に呼びかけたり、一〇年には地元の子供達と県外へかけるなど、年三回行った。十一年には東京へ出張教室をするなど工夫がこらされ継続している。

いずれの年も本教室の企画運営を通じ、生徒たちの自信を育ててきたことは確かである。

なお、この教室は国土緑化推進機構の「緑と水の森林基金」事業の助成金を運営資金としている。

3、文化放送一日大学

「しじゅうから一日大学」

平成八年(一九九七)九月十四・十五の両日、文化放送の番組企画「しじゅうから一日大学」の一行四十人が木曾路を訪れた。

この企画は、四十歳を過ぎても(しじゅうから)、いつまでも会社人間のままでなく、自然を満喫して人間本来の楽しみを見つけようというものである。四年前から敬老の日に合わせておこなわれており、今回は木曾路がその舞台となった。

参加者は東京圏の約四十人で、赤沢自然休養林や妻籠宿・馬

籠宿などを訪問した。初日の十四日の午後、本校演習林で林業体験等をおこなった。

本校演習林で林業体験

バスで正門に到着して、釣り橋を渡って演習林へ。ダムの湖面に映し出されるカエデの紅葉に感嘆の声が上がり、カメラのシャッターの音がひとしきり続いた。そして、林道端に設置されているミツバチの巣箱へ。周りを飛び回るハチを気にしながら箱を開けて観察し、実際に遠心分離機で蜂蜜を採取した。一方では女子生徒が「蜂蜜レモン」のジュースを作って参加者にもてなした。

生徒たちの指導で

その後三林班のヒノキ林に移動して、生徒の指導でノコギリを使って間伐をしたり、枝打ち機械を操作しながら枝打ちをした。参加者は皆初めての経験で大きな歓声を上げながらおよそ一時間心地よい汗を流していた。なかには一メートルほどの丸太にして持ちかえる人や、ヒノキの香りに感激して、わざわざおが粉をビニール袋に入れる人もいたり楽しい時間を過ごした。

さらにその夜は、本校巻山圭一教諭による「藤村と木曾路」の講演、木曾踊りの練習などと充実した一日を送った。

演習林を教室にがんばっている生徒さんたちがいます

文化放送では、当初間伐の体験中に、実際の様子を生中継する予定であったが、雑音が入って送信しにくいということで取りやめとなった。そのかわり翌日帰路の途中で電話レポートがされ、その模様が全国に流された。

アナウンサーは「今回の木曽路の旅行で、最も印象深かったのは美しい紅葉と、三百年の木曾ヒノキ、そして何よりも木曽山林高校の生徒さんが、自信を持って私たちに木の切り方を教えて下さったことです。演習林を教室にがんばっている生徒さんがいることを、わかってもらいたいです」とコメントした。

もちろん本校生徒たちや職員にとっても楽しい思い出となった。

4、信州博覧会への参加

信州博覧会は、「豊かな心の交遊と創造」のテーマのもとに平成五年（一九九三）七月十七日、松本市広域公園緑地内で華やかに開幕した。七十二日の入場者数は、目標の一六〇万人を大幅に上回る二四三万人余を記録し、大成功の熱気と興奮のうちに閉幕した。

マスコットキャラクターの塗り絵

本校は長野県林務部の協力を得て、参加を申し込んだ。学校としては、生徒の活動を紹介できるようなコーナーを期待していたが、信州博事務局より、スペースがないので木に親しむ内容のものをしてほしいという意向により、マスコットキャラクターのアルピーの塗り絵を行うことに決めた。

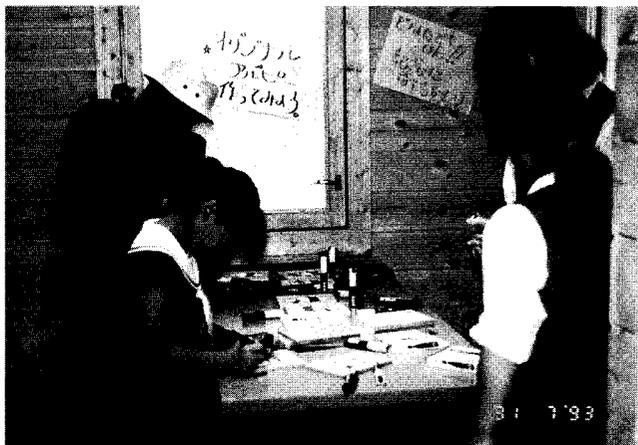
これは、あらかじめ学校のNCルーターで板材にアルピーを彫刻したものを、来場者に絵の具やマジックで塗ってもらうものである。ただ搬入費用については予算付けはされたが、材料費はすべて自前ということで大変苦慮した。しかし木材を上松町の中村木材、木曽福島町の田中木材より寄贈していただいたことは大変ありがたかった。

本校コーナーの盛況

四〇〇枚の板を加工して、七月二六日から三〇日までの五日間、森のクラフト館において林業科・インテリア科の生徒が来場者に塗り絵指導をおこなった。二六日の初日には板の半分のおよそ二〇〇枚を使ってしまい、その後の四日間の期間中材料を持たせるよう調整をするほどの盛況ぶりも多く的小学生や幼児に喜んでもらうことができた。（写8-17）

県下で高校生がこのような形で参加したのは本校のみであった。

一方、本校の古い林業標本を七月十九日から三十一日までの三日間貸出し、森のクラフト館において「林業古道具展」として展示され、長野営林局所蔵の木曾式伐木運材図会とともに来場者の目を奪った。



写8-17 アルピーの塗り絵を楽しむ小学生と指導に当たった本校生徒たち（平成5年7月「森のクラフト館」にて）

二、全国に活躍する生徒たち

1、国土庁長官賞に輝く

平成四年（一九九五）、木曾広域行政事務組合は「ふるさと基金十億円」を利用した地域活性化と圏域内のリーダー養成事業を企画開始した。それは年度ごとにテーマを決め郡民からの提言を募集し、その優秀者を海外研修に派遣しこの体験を地域活動に役立ててもらおうものであった。

その初年度のテーマは「木曾地域の景観形成に関する提言」で、本校林業科二年の西村やよいが優秀賞の一人に選ばれ、ヨーロッパ研修の榮譽を得た。翌年は「木曾の観光に関する提言」で同科三年の尾崎琴音が同様の榮譽を獲得した。さらに上田岳史、三沢徳彦も佳作に選ばれた。



写8-18 国土庁長官賞を受賞した西村やよい（林業科3年）

さて、西村の提言は翌年さらに国土庁の主催する「地域づくりコンペ」で、新しい森林文化の提言と評価され、国土庁長官賞の榮譽を得た。(写8-18)

この反響は大きく、彼女の提言をぜひ実現すべきとの意見が各方面より上がった。それを受け国土庁と組合が中心になり、提言をもとに景観形成の具体化企画プランが示され、少しずつ実施され始めた。

次に、西村の提言を掲載する。

美しい風景を後世へ伝えるために

木曾山林高校 三年 西村やよい

私は木曾山林高校林業科で、森林の作り方や経営、木材の利用方法等について勉強しています。今まで何げなく見ていたまわりの森林について興味を持つようになり、木曾谷の森林の美しさを感じるようになりました。そして、四季折々に表情を見せる森林は、私たち木曾谷住民の大きな財産であるように思います。この森林を中心とした美しい木曾谷の風景、景観をいつまでも後世に残すことが努めであると思い、日頃考えていることを次に述べてみます。

(一) 一定地域に、紅葉の美しい広葉樹林を造成します。

木曾は秋が急に訪れるので紅葉がとても美しいです。とりわ

け、開田、王滝や木曾福島以北では紅葉が美しい。中でも国道十九号線の山吹トンネル付近のケヤキの純林は目をみはるものがあります。ヒノキなどの木の成長は期待できず急傾斜地では、積極的に紅葉の美しいカエデ、モミジの森林を造成したほうがよいと思います。面積では最低でも五ヘクタール以上がよいのではないのでしょうか。

(二) 広葉樹帯で「万里の長城」をつくる。

榑川村から山口村までつづきで尾根筋に幅二〜三メートルにわたってカエデ、ナラ、モミジの広葉樹林帯をつくる。尾根筋は土地がやせているので、ヒノキは育ちにくいので広葉樹を植えば、土地も肥え、紅葉が美しく、空からの眺めは素晴らしいと思います。名古屋から北へ行く航路は木曾谷上空にあると聞きます。上空からは「万里の長城」に似た景観が見られるのではないのでしょうか。夏休み等にヘリコプターを使つての遊覧イベントを行つたら楽しいと思います。

(三) 山腹に木によって絵を描く

村章や動物などの形に木を植え森林の中に絵にそつてモミを植えます。モミのまわりに桜を植えると、春は桜によつて形が現れ、冬はモミによつて形が現れるのではないのでしょうか。相当地大な絵でないと、遠くから見えないと思います。

(四) 国道19号線沿いに桜かカエデを植えたらいいと思います。木曾は南北に長く、サクラの開化も山口村から榎川村までは一カ月余りの開きがあるといわれています。サクラを植えれば一カ月間楽しむことができると思います。又サクラはテングス病などの病気にかかりやすいので、紅葉の美しいカエデを植えることもよいと思います。カエデを植えたことよって長い紅葉も楽しめると思います。カエデにはいろいろな種類がありますが、丈夫でよく見かけるイタヤカエデが適していると思います。

(五) 看板をまとめて設置する。

昭和六十三年私たちの先輩が、夏休みに木曾に来られる観光客にアンケートをとったところ、美観を損ねるものに、ゴミと看板をあげる人が大変多かったとの事でした。ゴミはマナーの問題であるが、看板については余りにも乱立しているように見えてなりません。国道19号線は特に多いように思います。よく道路を走っていて、トンネルを抜け出ると、「どのような景色であろうか」とだれもが思ってしまう。そこに大きな看板があるのは、自然の美しさを悪くしていると思います。現在ある看板をまとめて設置する事がよいと思います。

(六) 各町村の入口に、間伐材によって案内板を作る。

案内板にも、大きな地図、特産品、名所、役場、学校などイ

ラストを入れた案内板がよいと思います。この美しい自然にマッチするため、ヒノキの間伐材によって作った方がよいと思います。

まだまだいろいろな方法が考えられますが、この緑豊かな自然を何時までも、後世に伝えるために、身の回りの緑に関心をもち、あらゆる場面を通じて努力して行くべきだと思います。

(丁)

2、キンキン大賞受賞

職業高校生の応援

平成六年(一九九五)二月十二日に文化放送の特別企画「職業高校生応援スベシヤル・めざせヤングマイスター」の六時間番組がおこなわれた。これは文部省の「職業教育活性化の中間報告書」を受けて、全国の職業高校生たちの学校生活を紹介し、職業高校生を応援する特別番組である。総合パーソナリティーは愛川欣也氏(キンキンの愛称)が務め、軽妙な語りで進められた。

職業高校生の作った農産物や木工・工芸品などを番組の中で紹介し、全国の聴衆者にプレゼントをするコーナーに出品依頼があった。出品物は普段の授業の製作品品ではなく、「キンキンブランド」として独創的な作品を二〇個作るということが出品条件であった。技術レベルが高く人気のある作品の学校には

「キンキン大賞」が授与されるということであった

独創的なキンキンブランドを目指して

依頼をもらってから、職員と代表生徒が出品物を何にしようか検討をおこない、その結果、林業科は炭俵に詰めた木炭と演習林で採った蜂蜜の瓶詰めを、インテリア科は阪神・淡路大震災の義援金箱を作ることにした。出品までの期間がわずか二週間ということもあって、生徒は夜遅くまで作品制作に励み、大賞をめざして懸命に取り組んだ。炭俵の両端や募金箱の板には、愛川氏の似顔絵をNCルーターで刻んだものであった。(写8-19)



写8-19 NCルーターで作った愛川欣也氏の似顔絵

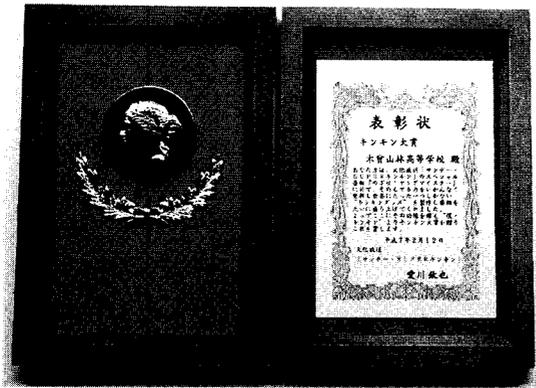
ついにキンキン大賞受賞

このコーナーに全国より十二校二四点の力作が寄せられた。

番組の中で、愛川氏が各校の作品を一つ一つ丁寧に紹介し、本

校の作品には「とてもすばらしい作品があります。長野県の木曾山林高校は、三点の作品を送ってくれました。タイムリーな義援金箱・哀愁を感じさせる木炭、そしておいしそうな蜂蜜です」このようなコメントで本校の作品が全国に紹介されました。そして、この番組中、聴衆者より木炭と募金箱に「欲しい」との声が多く寄せられ、しかも温かみのある作品ということで、キンキン大賞を受賞した。(写8-20)

数日後、この放送を聞いた東京在住の蘇門会員より、学校に受賞のお祝いの電話をいただいたりもしました。



写8-20 キンキン大賞の盾と表彰状

3、山火事標語コンクールに入選

昭和六十年（一九八五）、財団法人林野弘済会主催の山火事予防標語コンクールで、林業科二年の池上正孝の作品「この緑失う前の火の用心」が林野弘済会長賞・優良を受賞した。標語は全国の中・高校生・一般から募集、応募一八二六点の中から第三席の中に入った。この作品は、毎年のように貴重な樹木が灰になっているところからヒントを得てつくったという。

六二年には林業科一年の今井雄大の作品「緑は一〇〇年 焼ければ一瞬」が最優秀賞を受賞した。また林業科三年渡沢政則の作品「気をつけよう 緑をなくす小さな火」が佳作になった。

平成二年には、林業科二年の上原隆弘の作品「山火事 そうあなたの一本のタバコから」、林業科一年の植原健の作品「木の命 いきれば酸素 死ねば灰」が、それぞれ佳作となった。

六一年には、日本林業技術協会主催の山火事予防標語コンクールで、林業科三年の松原明彦の作品「この緑 あまい心で灰の山」が最優秀賞を受賞して、全国の山火事予防ポスターに採用された。

4、全国デザイン展入賞と校内作品展

①全国デザイン展入賞

インテリア科でも、積極的に校外コンクールに応募し、入賞を果たした。

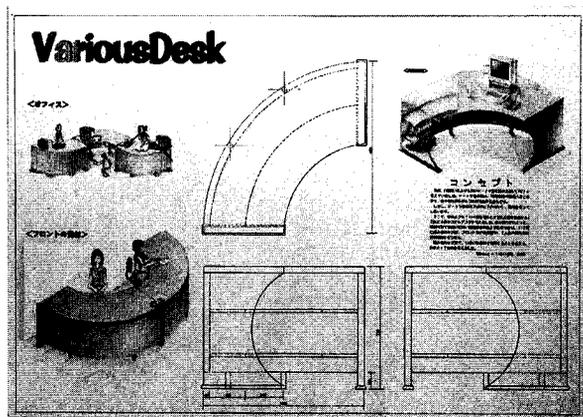
特に十年度実施された第十三回全国高等学校インテリアデザイン展に本校からインテリア科三年小林早苗の作品が福岡県教育委員会賞に入選した。

続く翌年の第十四回目の同デザイン展では次の二名が入賞した。

福岡県産業デザイン協議会長賞

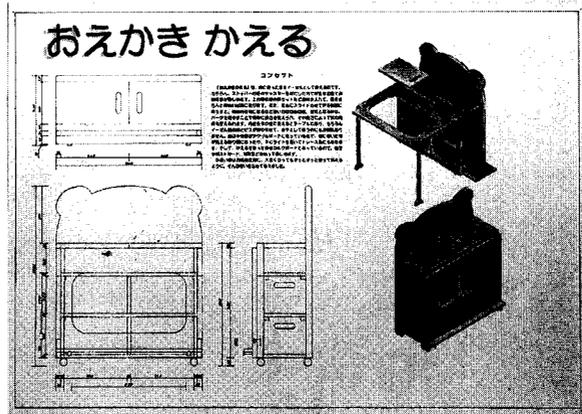
松谷美香（インテリア科三年）

作品名 Various Desk



写8-21 福岡県産業デザイン協議会長賞を受賞した松谷美香の作品

読売新聞社賞 田中麗子（インテリア科三年）
 作品名 おえかきかえる



写8-22 読売新聞社賞を受賞した田中麗子の作品

さらに同年の環境保護に関するポスターコンテストで田中麗子が関東甲信越大会において優秀賞に入選（巻頭グラビア参照）、同長野県大会でインテリア科三年中西千絵美が最優秀賞に入選した。長野県暴力追放センターによる暴力追放ポスターに松谷美香が入選。

木曾広域消防本部による標語入り防火ポスターに平成十年度インテリア科三年北原由華、翌十一年度、同柳澤洋子の作品が

入選し採用された。

②高いレベルの校内作品展示会

昭和五九年（一九八四年）作品制作の意欲向上を目指して、三年生を対象に作品賞を設けることとなった。以来この賞はインテリア科生徒の大きな励みになり、毎年優れた作品が発表された。

平成二年三月三日の新聞には、次のような記事が写真と共に掲載された

木曾山林高校第四二回インテリア科作品展が同校で開かれた。恒例の即売も行うとあって約二〇〇人が会場を訪れ、生徒たちの力作に見入った。伝統の展示会だが経験を積んだ三年生ともなると、完成度も高く、細かい部分まで丁寧な仕上げ、一年間四〇〇時間余りもかけて製作されたものであり、訪れた人はブロ顔負けと評価していた。

『信濃毎日新聞』（平2・3・3）

平成一〇年代に入り女子生徒も多くなり、作品にも変化を生じてきた。特に情報デザインコースで行う実習では、前述したようにデザインコンタールの入選、椅子を中心とした家具、身の周りの品々の製作へと変化してきている。

各年度の金賞あるいは優秀賞の受賞者は次の通りで、全員三年生である。

昭和五九年度	金賞	火鉢	田上幸夫
六〇年度	金賞	両面戸棚	内木 靖
六一年度	金賞	飾棚	高寺正浩
六二年度	金賞	書棚	児野正博
六三年度	金賞	サイドボード	尾崎賢二
平成 元年度	金賞	食器棚	古田洋一
二年度	金賞	洋服ダンス	磯貝洋介
三年度	金賞	食器棚	丸田友明
四年度	金賞	サイドボード	城田祐輔
五年度	金賞	茶ダンス	大橋康昭
六年度	金賞	該当作品なし	
七年度	金賞	テーブルセット	山田 剛
八年度	金賞	両面食器棚	笠原 亮
九年度	金賞	下駄箱	大野田武史
一〇年度	優秀賞	デザインポスター	古畑一徳
十一年度	優秀賞	家具デザイン	田中麗子
十二年度	優秀賞	食器棚	古林 晃

なお金賞・優秀賞以外の受賞者は部門・資料編に掲載した。

5、森林もりの市参加

平成六年（一九九四）、本校は林野庁が主催する「森林の市」（東京代々木公園）に全国の林業高校生としては初めて参加することになった。この年は生徒五名と職員四名が、小沢普照元林野庁長官の主宰する森林塾同人会のテントを間借りする形で始まった。

内容は本校で生産しているシメジや苗木、炭、木工品などの販売であり、大きな声で応対している様子は実に新鮮に受けとめられ、都民の感動を呼んだ。翌年より毎年、全国の女性林業技術職員グループのレディース・ネットワーク21との合同スピールした。（写8-24）



写8-23 平成9年度金賞を受賞した大野田武史の作品

これより毎年学校をあげての行事となり、平成九年からは独立したテントで参加することができるようになった。販売品も林業科とインテリア科の多岐にわたる作品が並び、学校紹介や発表も年を経るごとに活発化していった。さらに平成十年からはPTAの方々も参加し、総勢三十名を数えるほどになった。そして木曽地域の地場産品の販売・宣伝をし、本校のテントはこのイベントの中で、最も活気のある中核的な存在となっている。(写8-25)



写8-24 ステージでインタビューを受ける本校生徒たちと遠山善治教諭（平成7年6月）

このイベントは農業や教育関係の新聞や長野県内のマスコミには毎年取り上げられ、生き生きとした本校生の様子が報じられている。この参加活動が、学校自身の活性化だけでなく、今後は町や村、地元有志の参加や活性化にも貢献できると期待されている。



写8-25 激励に訪れた中須勇雄林野庁長官（当時）を囲んで記念撮影（平成13年5月26日）

6、林野庁・文部省訪問

① 林野庁長官と林業を語りあう

林野庁を表敬訪問

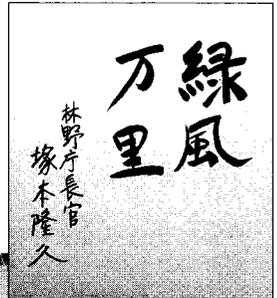
平成七年（一九九六）十二月、林業科生徒十名は林野庁を表敬訪問した。時の塚本隆久長官に林業高校の様子を語り、それぞれの具体的な進路について報告し、自分達が進もうとしている林業の現状を憂い改善を訴えた。また、生徒が自ら制作した染色木によるクラフト細工を記念品として差し上げ、お礼として長官直筆で「緑風万里」の色紙（写8-26）を頂戴した。

文部省訪問 学校での活躍の様子を報告

さらに彼等は文部省を訪れ、学校での活躍の様子を初等中等教育局長を始めとする方々に報告し、いずれも生徒の活動と熱心な説明に感動していた。実に多忙な日程であり、滅多に会う事のできない方々に面談したことで、生徒は緊張し疲れ切った様子であったが、強い満足感を味わっているようだった。

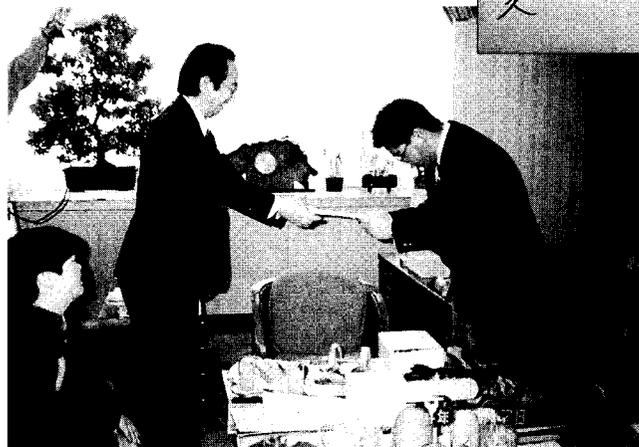
また東京蘇門会より心暖まるもてなしを受けた。

このことは、大きくマスコミにも取り上げられ、林業関係だけでなく、県下の教育関係者や郡内の人々の話題もさらった。



写8-26 塚本隆久長官のサイン入り色紙

写8-27 塚本長官からサイン入り色紙をいただく古畑伸一生徒会長



② 寺脇研氏と夢を語り合う

その後、平成九年には、「この人に会いたい。」のかけ声のもと、当時文部省のスポークスマンと呼ばれていた医学教育課長の寺脇研氏（元、職業教育課長）との面談が実現し、林業科とインテリア科の生徒六名が文部省で対談をし、学校生活や進路



写 8-28 寺脇研医学教育課長を囲んで記念撮影
(平成 9 年 3 月 19 日)

希望について夢を語りあった。(写 8-28)

7、農業クラブ活動

農業クラブに加盟した後の本校の活躍は、前章のとおり測量競技と農業鑑定競技を中心に目覚ましいものがあった。中でも農業（林業）鑑定競技は年三回の校内競技を行い学校代表を選んだ。また意見発表は校内大会が定例行事として定着していっ



写 8-29 本校農業クラブを代表して歓迎の挨拶をする西村進
(3年) クラブ長

た。プロジェクトによる研究発表は、平成に入った頃より生徒の自主研究グループが発足し、課外研究活動も始まった。(部門・資料編参照)

本校を会場に県大会

平成九年（一九九八）、長野県学校農業クラブの県大会が本校で行われることになり、準備が進められた。すべての競技が同日に行われるのは、この年が最後となったが、その大きな大

会を、本校はインテリア科生徒を含む全校生徒の協力で成功裡に終わらせることができた。さらにプロジェクト研究部門で本校の自主研究クラブ生徒が長年の研究成果を発表し、最優秀賞の栄冠を本校としては初めて得ることができた。その翌年から二年連続して意見発表の部でも最優秀賞を獲得し、いずれも北信越大会へ進んでいる。(部門・資料編参照)

8、日本林学会中部支部会で生徒が発表

本校は、日本林学会中部支部会の理事校である。数ある林業高校の中で本校と天竜林業高校だけが、その責務を負っている。

高校生は初めて

平成十年十月十日、静岡大学農学部で開催された学会での研究発表に本校生徒五名が参加し、林業経営の部で「間伐材の有効利用をめざして」の題目で高校生としては初めて発表を行った。内容はそれまで先輩が積み上げてきた研究成果を紹介し、先端技術を駆使した高校生ならではの研究発表であった。また、高校での研究活動や課外活動などの林業高校紹介も合わせて行った。

参加者のほとんどが大学や研究所の研究者であり、学会で初めての高校生の発表は、とても新鮮に受け止められて高い評価を得た。

この発表内容はその年の日本林学会中部支部大会報告集に論文として採用された。

9、アンテナショップ開設

平成九年四月にマスコミ関係者の組織するボランティア団体「ふるさと往来クラブ」(代表古川猛氏)から都市と農山村の交流と地方の活性化を目的にしたアンテナショップの開設に参加されたいとの要請があり、本校は生徒の研修や情報発信、生産物の販売と情報収集を目的に、このアンテナショップの開設に参加協力した。

東京都世田谷区祖師ヶ谷大蔵の駅前商店街の中ほどに「生活の森」と銘打った全国の地場産品の展示販売を行うアンテナショップは、その年の七月開店し、開設当初から高い人気を博した。店内は本校の柿崎庫之助教諭や中村昭重元PTA副会長らの協力で、内装は木曽ひのきが使われた。食堂は演習林の間伐材で製作したテーブルと椅子が使われ、都内の一角で本校の名前を印象づけた。

本校から送られた炭、木工品、きのこ等が販売され、特に炭は人気の高い商品であった。また、その年の八月には生徒が販売実習をし、平成十一年にはアンテナショップ内で地域の人を集めた「森林(親林)教室」を開催し、ほう葉巻きづくりや炭の実験などで学校の紹介と都会の人との交流を深めた。

生徒は日頃見せない力をここでも発揮し、高い評価を得た。高校が都内にアンテナショップを開いている例は他にはなく、近年の本校の特筆すべき活動の一つといえる。



写8-30 「生活の森」の前で自作の絵を展示して、手作りの絵はがきや小物などを販売する美術部の生徒たち
(平成13年8月) (野口牧子同部顧問提供)

10、産業教育フェアへの参加

全国の専門高校生が集う

産業教育フェアは、専門（職業）高校で学んでいる生徒が、

日頃の学習の成果を公開・展示し、新しい時代に即した高等学校における産業教育の振興をねらいとして、平成三年より始まった。

本校は、七年の第五回の和歌山大会に林業科三年の大平直己と橋詰浩二の二名が参加した。「今、輝く未来の産業を君の手で」のスローガンのもと、和歌山マリナシティを主会場におこなわれた。会場は潮の香りのする海を埋め立てた大変広い場所であった。おりしもNHKの大河ドラマ「八代將軍吉宗」の舞台ともなっていることもあって賑わいを見せていた。このフェアでは、作品展示発表をはじめとして、ロボットコンテストやお魚料理・青少年科学技術フォーラムなど多彩な催し物がおこなわれた。

長野県代表として県旗をもって入場

長野県からの参加は本校だけということもあって、開会式には県代表として長野県旗を持つて入場をおこなった。

本校は「作品展示発表部門」に参加した。生徒の作った「木炭」や「景観シミュレーションの絵」を展示し、二人の生徒が元気よく来場者に説明をおこなった。ここには全国の農業・工業・商業・水産・家庭・看護の各学科より百点余の生徒作品が展示された。各学校に一坪ほどのブースが割り当てられていて、ミニ日本庭園や缶詰などの農産加工品、あるいは工業高校のロボット展示があったりとさまざまであった。どれも日頃の学

習の成果が作品に凝縮され、たいへんすばらしく「技の逸品」であった。

長野県下の農業高校としては初めての参加であったが、全国の専門高校の真摯な教育実践とその成果は刺激的で啓発されることが多くあった。参加した生徒も、専門高校の魅力を再認識して、さまざまな人との交流をとおして、多くの感動を得たようであった。このフェアは産業教育の理解を求めらばかりでなく、実践的な教育の場や職業教育のあり方を探る場としても意義をもつものであった。

11、長野冬季オリンピックをヒノキ苗で盛り上げる

本校ヒノキ苗が会場を飾る

長野冬季オリンピックの開催が決定してから、県下の農業高校十二校は、日頃の学習活動の特性を活かして、花などを出展し参加すると共に、交流を通して国際理解が深まることを期して、平成七年度より実行委員会を設けて検討や研究を重ねた。その結果、同十年二月のオリンピック本番には、県下の農業高校は花などの出展を行った。本校もこれに参加し、花ではなく、ヒノキ苗（苗高一メートル）を三〇本ほど、オリンピック村の表彰式会場に飾った。

オリンピックリングシール圖案入賞

これより前に行われた「オリンピックリングシール圖案コンクール」では、インテリア科三年の藤沢亜希子は優良賞を獲得した。（写8-31）



写8-31
藤沢亜希子の作品

また、各地区では聖火ランナーや伴走者をつとめる生徒や職員がいた。

12、マングローブ林での実習体験

平成九年三月、本校生徒らのフィリピンでの植林体験ボランティア（後述）は、さまざまな可能性を広げた。

例えば、同年夏休みには、それをきっかけに沖縄県西表島の「西表熱帯林育種技術園」での実習につながっていったのである。これは林野庁林木育種センターの協力を得て行ったものであるが、その概要は次のようである。

指導職員 高島 顕・三沢隆文
 参加生徒 林業科二年

首藤正典・長島寿二・湯川晃伸
 林業科一年

大久保勇太・加藤明広・田澤優志
 堅道智昭・野村裕司・松下太一

奥原謙一

日程 七月二十九日 出発・西表島着

三十日 海岸マングローブ林視察

三十一日 西表熱帯林育種技術園の下刈り

八月 一日 ハイビスカス・ユーカリグランデイスの
 挿し木

二日 琉球大学ハイビスカス園視察・マンゴー

農園視察。・他

三日 (移動) 仲間川展望台・視察

四日 南風見田海岸の視察・リーフ見学

五日 石垣島へ移動(民家宿泊)・島見学

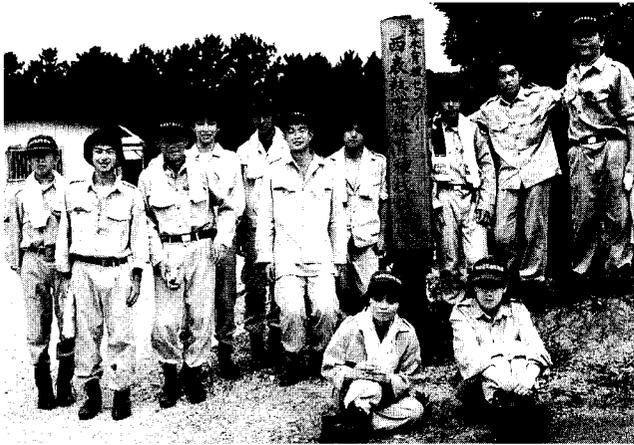
六日 帰校

木曾では見ることでできない熱帯林を「直に触れ」たことは、生徒たちに大きな感動を与えた。そしてそれは単に珍しいものを見、経験をしたというだけでなく、学校で学んだことを下刈りなどに生かすことができ、さらに西表島で体験したことをそ

の後の高校生活や人生に生かすことができた。これは林業を学ぶ本校生徒ならではの活動である。

事実、その後農業クラブの意見発表会で、その驚きと体験、そして今後に生かしたいことを述べた者もあり、また大学進学にあたっては、熱帯林を含む自然保護や環境問題を解決したいという希望を持って進学する者などがでてきた。

この西表島での熱帯林研修は、全額生徒の自己負担であるが、翌十年にも実施され、女子二名を含む十二名が参加した。今に生きる「林学は観察の学問」である。



写 8-32 西表熱帯林育種技術園での記念撮影(平成10年)
 (高島顕教諭蔵)

13、資格取得に頑張る

半年で延べ三三七名が合格

本校でも各種資格取得が行われるようになってきた。従来から行われていた林業科の測量士補、インテリア科のトレース・レタリングなどの他に、次のように各種の検定・資格取得試験が行われて、本校生徒も次々と挑戦し合格していった。

平成一〇年には四月からの半年だけで、延べ三三七名が合格した。

毒物劇物取扱者試験

三名合格

危険物取扱者試験

二六名合格（乙種・丙種）

レタリング検定

六七名合格（二～四級）

（内二級 六名合格）

電卓技能検定

一四〇名合格（四～七級）

小型車両建設機械

三三名合格（受験者全員）

日商ワープロ検定

六名合格（三～四級）

日商簿記検定

一名合格（四級）

漢字能力検定

三七名合格（三～七級）

実用英語検定

十七名合格（三～四級）

数学検定

七名合格（準二～三級）

危険物取扱者試験全類合格で表彰

平成十一年度には、難関危険物取扱者試験の全類（甲種・乙

種等計六類・丙種の合計八回の試験）に合格し、次の三名が十二月消防試験研究センターから特別表彰された。

林業科三年 堅道智昭

井上伸吾

二年 田口富広

これら資格取得・検定受験は生徒たちに大きな励みと自信を与えた。そして地味ながら着実に生徒たち自身にその可能性を気付かせ、その後も合格者が続いた。

基礎学力向上への努力

平成九年五月より、全校の基礎学力の向上のために、分掌の中に学習指導部を位置付け、全校一斉朝ドリルの取組みが始まった。

これは朝のショートホームルーム後、一〇分間をドリルの時間とし、英語、国語、数学（後、社会、進路）の基礎をドリル学習するものであった。各教科四回（四日）実施して一回テストをし、不振者には補習があった。さらに毎学期の始めには実力テストを行っている。

これらの取組みの中で、例えば国語の漢字テストでは一年後に、一〇〇点満点中、全体平均で一〇点以上向上するなどの成果を見せた。

●コラム 先輩の生き方に学ぶ

昭和六三年、川合亮三（43回）の闘病記『筋肉はどこへ行った』（新訂版）が、約八〇冊ほど本校へ贈られた。内容は、「筋萎縮性側索硬化症」と十六年にわたり闘う川合の壮絶な姿であった。病気は全身の筋肉が次々と動かなくなる不治の難病である。特に、口の筋肉が動かなくなり、唯一の表現手段であった筆談も、次第に手の筋肉が衰え、字が書けなくなる苦悩を描いた。最後は、文字盤を目で追い、その視線の位置から看病にあたった奥さんがその文字を判読したという。そうやって作られた短歌が四百余首、次の「跛曳き……」の歌は朝日歌壇に入選した作品である。

跛曳びつこひき数歩あゆみて垂る血舐なめ夕暮れの道野良犬は行く
呼吸器の息の合間に歌を詠み妻に目で乞い文字盤を指す

この本は、さっそく国語科の大日方章教諭らによって取り上げられて教材となり、教室で読まれた。さらに巻山圭一教諭編集の『国語補助教材』に掲載され、最後まで人間らしく生きようとする川合の姿は、多くの後輩たちに深い感動を与えた。



写8-33 闘病記「筋肉はどこへ行った」

三、世界に活躍する生徒たち

1、初めての海外林業体験

①フィリピン林業体験

地球環境の悪化、熱帯林の減少が危惧される中、平成九年（一九九七）、全国の林業科の生徒を対象とした「フィリピン森づくり体験ボランティア」へ応募し、同年三月に一年女子四名と職員二名が参加した。

参加者 職員 宮下理人・高島 顕

生徒 伊藤絵美 (林業科)

吉村美津穂 ()

黒畑知里 ()

唐沢さや香 (インテリア科)

体験の内容を次に示す。

(日) (内 容) (宿泊場所)

一日目 結団式・オリエンテーション 成 田

二日目 成田からマニラへ マニラ

三日目 研修地への移動(バス七時間)

現地リーダーによる説明会 ヌエバビスカヤ州

四日目 植林地見学・苗畑作業

五日目 学校訪問、交流会

六日目 植林、消火訓練、交流会

七日目 州知事表敬訪問

八日目 移動 マニラ

九日目 観光、マニラから成田 成 田

参加した生徒は、フィリピンの荒廃した国土と熱帯林がこうならざるを得なかった歴史的背景に驚き、日本を始めとする先進諸国の責任を深く感じていた。また、日本やNGOの協力を得て、現在森林再生と地域作りへ向けて新たな取り組みが生き生きと始まっていることを直視することができ、強い感動と意

欲を覚えていた。

また、滞在中はフィリピンの人々と英語とタガログ語と日本語を交えて夜遅くまで国際交流を深めるなど現地の人々の優しさにも触れ、自らも信じられないような毎日の体験に充実感と再来の決意を新たにしていった。

彼女たちの体験は新聞紙上(写8-35)に大きく取り上げら



写8-34 フィリピンのヌエバビスカヤ州の現地にて (高島顕教諭蔵)

1997年(平成9年)5月7日(水曜日) 信濃毎日 3

木曾山林高校生4人 森づくりボランティア

熱帯雨林保護 役に立ちたい

フィリピン 伐採 焼き畑…赤土広がる山肌



山小屋に泊まり 苗の世話や枝打ち体験




夕刊トピック

熱帯雨林保護のボランティア活動が、信濃毎日を通じて広く知られるようになった。今年も、木曾山林高校の4名が、フィリピンに渡り、森づくりボランティアに参加した。現地では、苗の世話や枝打ち体験など、熱帯雨林保護の活動に積極的に参加している。この活動を通じて、環境保護の大切さを学び、国際理解の姿勢を養っている。また、この活動を通じて、国際理解の姿勢と意欲は一段と高まり、翌年も三名の生徒と職員一名が参加している。また、この年開設したインターネットの本校のホームページでこの内容を全世界へも発信している。

写8-35 フィリピン森づくり体験ボランティアに参加した生徒たちの様子を大きく報じた信濃毎日新聞



写8-36 現地で苗床へ種植えをする生徒たちと逸見教諭

れ、地元紙では十四回の連載、信濃毎日夕刊では一面全体の特集記事として扱われたほどである。この反響は木曾だけでなく全県の感動を呼び彼女たちは様々な集会やインタビューに駆り出され、山林高校生の新しい学習の形が始まっていることを実感させた。

校内においても影響は大きく、国際理解の姿勢と意欲は一段と高まり、翌年も三名の生徒と職員一名が参加している。また、この年開設したインターネットの本校のホームページでこの内容を全世界へも発信している。

平成十年の「フィリピン森づくりボランティア」には、逸見充智教諭引率のもとに、一年女子林業科の野口律子・清水麻由、同インテリア科の松谷美香の三名が参加した。(写8-36)

2、インドネシア植林ボランティア

平成十三年二月四日から九日の六日間、「林業専攻高校生国際交流研修会（国土緑化推進機構企画）」に、全国から十九名の高校生が参加し、本校からも職員及び生徒四名が参加した。

参加者 職員 宮下理人（林業科）

生徒 古野秀幸（林業科二年）

伊藤麻矢（ ）

島尻美穂（ ）

佐々木正悟（ ）一年

生徒達は、事前に英語やインドネシア語の学習をしたり、インターネットにより現地の政情や、熱帯林の現状を調べるなど実に熱心であった。

そして現地では、一九九〇年代より頻発する熱帯林の火災早期発見・消火・予防に関する日本の協力サイト見学、世界三大植物園の一つボゴール植物園の見学、熱帯林皆伐地の植林体験、現地高校生との交流会と学校訪問、ポロブドゥール遺跡の見学、ガジヤマダ大学演習林の見学、バリ島のマングループ林再生プロジェクトの見学と、実に盛り沢山の内容であった。

わずか六日間ではあったが、日本国内では味わえない大きな感動、特に林業を学ぶ大切さ、言葉はうまく通じなくとも現地



写8-38 ジョグジャカルタ第3高校での歓迎交流会（同）



写8-37 植林ボランティアをしたトゥトゥン村にて、現地の子供たちと記念撮影（古野秀幸・3年・提供）

の人々の暖かい心に触れた大きな感激を胸に帰国した。中でも現地高校生との交流は特に印象的で、帰国後も手紙や電子メールを交わしている。

●コラム OBも頑張る フランス画壇に卒業生の絵

フランス画壇の前衛作家が集まる、国際的にも評価の高い「サロン・ド・メ（五月）」に、平成九年（一九九七）、日本から招待出品する六点の内に、榎田千秋（65回）の作品が選ばれた。

選ばれた作品は抽象画「回想 Monotone」（50号）で、白と黒を基調に、アクリル絵の具や石膏を使った抽象画。（巻頭グラビア参照）

榎田は昭和四三年三月、工芸科卒業、塗装業のかたわら、さらに向上をめざして頑張っている。「思い出の記」参照



写 8-39 信濃毎日新聞

第五節 生徒会の活性化と活躍

一、ひのき祭の活性化

1、ひのき祭の再生に向けて

この時期のひのき祭は、毎年四月に実施するか否かを決めていた。

平成元年（一九八九）秋の第二〇回ひのき祭も実施を決めたが、諸般の事情により、一般公開が中止された。校内祭のみで、スポーツ大会とクラス劇の発表で終わった。

生徒会長の杉本一彦は、全校生徒にその無念さとともに、そのこと以前に一般公開の準備も進んでいなかったことを述べ、ひのき祭及び生徒会の再建を訴えた。

①再開された ひのき祭

翌二年、生徒会長東山匡人のもと、ひのき祭の一般公開も再開された。インテリア科製図班による「酸性雨と環境」の発表は、木曾地区での酸性雨の可能性を示し注目された。また翌年にひかえた九〇周年記念にあわせて、一年B組が取り組んだ「木曾山林高校の歴史展」なども発表された。

② チャレンジ

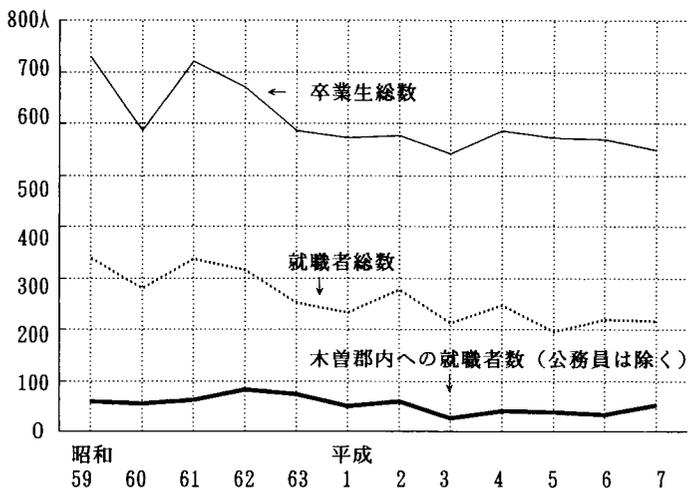
平成三年のひのき祭では、尾羽林英樹会長（現、本校教諭）のもと、「チャレンジ」をテーマに、さまざまな企画に取組んだ。

特に一般公開では、生徒自身の手による公開講座がメイン企画であった。林業科ではきのこづくり、盆栽、再生紙、立体写真、パソコン、木の玩具の六講座、インテリア科ではNCルーター、ガラス、茶托、パソコンの四講座の公開教室が行われた。担当係の赤羽清吉は「多少は先生方の手を借りたにしろ、大部分を生徒自身で実際に実行するという大きなものを得ることができた」と、その感想を述べた。またグラウンドでは貴重な乗馬体験などもあった。

③ 木曾サミット（木曾の未来を考える会）

四年、滝沢誠会長のもと、第二三回ひのき祭では、木曾の過疎化をテーマに「木曾サミット（木曾の未来を考える会）」が開催された。これは木曾郡内十一町村の町村長を本校に招き、生徒達も十一班に分かれて、それぞれ町村長を囲み過疎化の問題を討議するものであった。当日は、木曾福島町の中村英之町長はじめ九人の町村長、大桑・山口村の両助役が参加した。

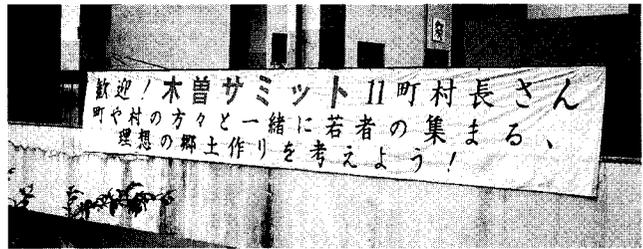
図8-6 木曾郡内にある3高校の卒業生の就職状況（木曾福島公共職業安定所調べ）



開会式では、基調提案がなされた。その中で木曾郡における過疎化の実態は、五年で小さな村が、十年で大きな村が消えるほどの激しさであること。その最大の原因は高校を卒業した若者たちが郡外へ流出することであり、郡内にとどまる者は全体の一割にも満たないことから、この問題は高校生の問題でもあることが提起された。またこれより前に行われた木曾郡内三高校の生徒及び保護者のこの問題に対する意識調査の結果もプ



写 8-40 開会式で挨拶する滝沢生徒会長



写 8-41 校内に張られた横断幕

木曾サミット宣言

私達は、今日初めて木曾郡内の十一町村長さん方とこうして一堂に会し、木曾郡内の過疎問題について話し合うことができました。特に各分散会では町村長さんを囲み、木曾の未来について共に考え語り合うことができたことは私達にとって大きな喜びであり、力強い励みとなるものでした。

私達はこのサミットを通じ多くのことを学びました。戦後の高度成長以来の急激な人口減少の一番大きな原因は、私達のような若者の流出です。この問題解決の大きな鍵の一つが私達の手の中にあることも分かりました。しかしこれは自分自身の生き方に関わるものであり私達も考え悩みます。アンケートによれば、この問題も深刻な問題だととらえている人が九十パーセント近くいます。ところが将来のこととなると、高校卒業後は木曾郡内から出ないと考えている人は十パーセントほどしかいません。

しかし私達は、今日町村長さん方との話し合いを通じ、木曾の持つ素晴らしさ、その中でより良い郷土作りに励まれている方々がいることを知り、改めて木曾の未来に明るい希望を持つことができた思いで一杯です。

私達はもともと町や村の方々と語り合いたいと思っています。そして木曾が私達若者にとっても、子供も大人も老人も、誰もが生きがいをもって生きることができると、明るい未来

ントにより報告された。その後、それぞれ町村長を囲み分散会が一時間半にわたり行われた。各分散会により発言数のばらつきがあるが、生徒から率直な意見が出され、この問題に対する認識を新たにしたい。最後の締めくくりに全体会では、次のようなサミット宣言が出された。

を持つた木曾になるように努力したいと思います。そして、私はこの自然豊かで美しい木曾の地に生まれたこと、この地にある木曾山林高校に学ぶことを誇りとすることを宣言します。

一九九二年十月十七日

長野県木曾山林高等学校生徒会

このサミットについて、生徒会長の滝沢は、

分散会では、自主的発言は少なかったものの、たくさんの意見が出された。「コンビニエンスストアが欲しい」「働き場が少ない」など、決して内容の濃い意見ではなかったが、その反面、素直で、普段思っていることを率直に伝えた大変いい意見だった。また、町村長さん方からも、たくさんのアドバイスもいただき、終わってみれば大変充実したサミットとなった。

今回のサミットの成功は、町や村の方々、PTAの方々、先生方、生徒のみなさんの多大な協力のおかげだった。また、町や村が丸となって過疎問題に取り組んでいることが、今回のサミットで実証された。だから、私たちは、サミットの規模や活動の拡大、サミットの継続に努め、少しでも町や村に協力していかなくてはならない。それが今回協力してくれた方々への恩返しでもあり、過疎問題の解決につながると思う。

「樹芸」3号

と総括した。

また新聞委員会の「木曾サミットについてどう思いますか。」とのアンケートによれば、

- ・ 過疎化を考えるのによい機会だったと思う 一七六人
- ・ 特になんとも思わない 九一人

であった。この問題の難しい面を見せつけた。

一方、積極的にご協力いただいた地元中村町長は、「町の未来を有権者に語ることはあっても、次代を担う高校生と語ることはなかった。このサミットは極めて貴重な機会であった」と感想を述べ、その様子は町議会に報告されたという。

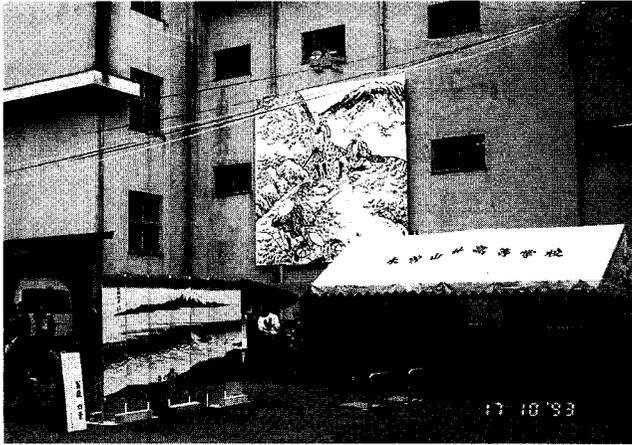
またSBCテレビ、信毎、中日、長野日報などでも取り上げられ、特に長野日報はアンケート結果をもとに特集を組んだ。

④夢への開拓者 増えた好企画

平成五年、「夢への開拓者」をテーマに、古畑伸一会長を先頭に、今までにないひのき祭をという意気込みで、特に参加する全ての人を楽しめるものを目指し準備が進められた。そして、ひのき祭を前に、初めて全校生徒による文化祭総決起集会が開かれた。

前夜祭では、体育館で仮装大会、ビンゴ大会、イス取りゲー

ムなど全校で楽しめるものが企画され好評を得た。また中庭の校舎の壁には巨大な壁画が飾られた。壁画はベニヤ板を使い、縦横とも五・四メートルの大きさであった。それを十八区画に分け、各クラス二区画を受け持ち、全校で完成させた。図案は『木曾名所図絵』の中の鳥居峠の図を模写したものであった。さらに運動会が久し振りに開催され、全校で楽しんだ。また公開日には中庭に屋台も出されるようになった。



写8-42 巨大な壁画が登場した（平成5年）

⑤ P T A の協力

平成六年、伊藤裕樹会長の二五回ひのき祭にも、この巨大壁画や前夜祭を体育館で全校が集まり楽しむ方法が受け継がれて



写8-43 巨大壁画
（平成6年）

写8-44 クラス劇 2年B組（平成6年）

いった。この年、初めてPTAの協力を得て「PTAバザー」が開かれた。事前に臨時PTA理事会が開催され、バザーに出される品物の収集及び回収に協力していただいた。

以後本校の恒例企画となり十一年のひのき祭では、旧体育館いっぱいの大規模なバザーに発展した。またクラス劇では、クラスの劇の中に担任も加わり生徒とともに、熱演をして好評であった。

⑥ 第二回木曾サミットと後夜祭の改革

平成七年、寮生の日光^{あまほ}天土が生徒会長になった。彼の提案により、初めて「三年生を送る会」が企画され、三月卒業式の前日実行された。また執行部の発足時より、ひのき祭におけるメイン企画として「第二回木曾サミット」を計画した。テーマには、再び木曾の過疎化の問題を取り上げた。前回でできなかった事前準備に力を注いだ。

二月 地域おこしに活躍する「火牛太鼓」の皆さんから和太鼓の指導を受ける。(生徒会執行部)

五月 過疎化のため廃校予定の妻籠小学校を見学、二年生がたった二人という授業を参観した。(同、写8-45)

七月 全生徒が十一班に分かれ、郡内十一町村の過疎化対策の施設を中心に見学。(一日)

八月 木曾の主産業である林業の現地調査のため、王滝・上松宮林署、木曾森林組合を視察(同 執行部)

九月 木曾へイターン、Uターンされた方々を招き、全校討論会

第一回同様、過疎問題に対する木曾郡内三高校の生徒、父母に対するアンケート実施。さらに高齢者に対するアンケートも新たに実施した。

十月二二日 第二回木曾サミット(木曾の未来を考える会)



写8-45 平成9年4月に廃校が予定されている南木曾町の妻籠小学校を見学。2年生のたった2人の授業を参観して過疎問題について考えた

を実施。

第二回木曾サミット（木曾の未来を考える会）

十一町村の内、町村長八人、助役・収入役三人が出席。まず全体会で問題提起、十一分散会、全体会のまとめとやり方は前回同様であった。サミット宣言では、「（前略）（さまざまなる事前調査を通して）そこで見たものは、若者の意識を含めて、深刻な過疎化の実態でした。しかし、こうした活動をする中で、



写8-46 日光生徒会長の分散会報告

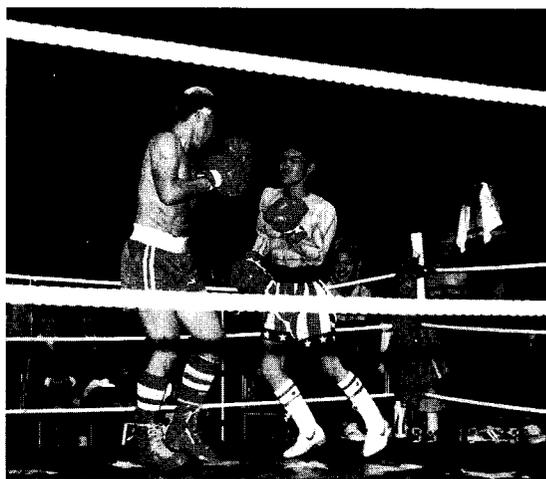
地域活性化のために地道に努力されている多くの方々にお会いすることができ、そして何より嬉しかったのは、暖かい声援をたくさん送っていただいたことです。（中略）私たちは今回改めて見つめなおした木曾、自然豊かな郷土を誇りとするここに宣言します。」と述べた。

また副会長の新居健太郎は『樹芸』第六号「木曾サミットをやって高校生のできることの大きさを知った」と感想を述べた。また、このサミットは二回にわたり過疎問題を取り上げたことから、早くからNHKや新聞社各社などから注目され、大きな反響をよんだ。

しかし終了後のアンケートでは、生徒の参加率は七八パーセントで、前回に比べ欠席する生徒が目立った。また各分散会でも、相変わらず生徒の自主的意見は少なく盛り上がり欠けたものになったことから、この企画そのものに対する執行部批判も出てきた。

クラス劇では、三年A組（担任池田正教諭）が、「ロッキー」を、初めてビデオと劇を組合わせて発表した。スケールの大きさ、精巧さ、迫真の演技など大きな感動を与えた。これ以後、クラス劇の中にビデオ作品が登場するきっかけにもなった。

また、後夜祭に大きな改革の手が加えられ、全員参加のゲームが取り入れられ、ファイヤーストームの後、執行部の諸君が一人一人壇上上がり、感想を述べる場面は、語る側にも聞く側にも大きな感動をよんだ。



写8-47 クラス劇「ロッキー」 池田教諭(左)も生徒と共に熱演

2、学校を変えよう

①ひのき祭大規模改修と実行委員会の発足

平成八年、生徒会顧問も大きく変わった。特に五明拓哉教諭の顧問就任は、極めて大きな力となった。その指導のもと生徒会長の新居健太郎は、「ひのき祭大規模改修」をテーマに取組んだ。ひのき祭を一部執行部だけではなく、生徒全員が参加でき楽しめるものを目指した。そのために初めて「ひのき祭実

行委員会」を組織した。この組織には執行部以外の生徒も参加でき、下級生を含め三十名ほどの大きな集団になった。その中で、次の三つの企画をメインに生徒総会に下ろされ決定した。

- ・山林なんでも鑑定団
- ・二十四時間ソフトボール
- ・クラス劇

「山林なんでも鑑定団」は、テレビの人気番組「開運なんでも鑑定団」の木曾山林高校版である。鑑定士の安岡路洋氏を招き、本校所蔵の測量器具を鑑定していただくだけでなく、広く地域に参加を呼びかけるものであった。

「二十四時間ソフトボール」は、土曜日の午後から全クラスが交替でソフトボールを行い、夕方六時以降は、照明器具のある町民グラウンドに会場を移し、有志による徹夜のソフトボール大会で、二十四時間やり続けるというものであった。

またクラス劇は、本校の伝統であるから、さらに発展充実を図ろうとするものであった。

②学校が変わらなければ

その年に行われた本館(教室棟)の大規模改修に合せて、ひのき祭のテーマも「大規模改修」とし、前年とは大きく変わった

た企画となった。

しかしその実行委員会の前に大きな難問が立ち上がった。それは、以前からもそうであったが、その年六月には特にひどくなった、本校生徒による登下校時のマナーの悪さであった。特に一部生徒によるゴミの投げ捨て、喫煙など、その態度は町の方々から大きなひんしゆくをかっていた。

この事態を実行委員会では、深刻に受け止めた。そして「学校が変わらなければ、ひのき祭の成功はあり得ない」との結論に達した。そこで通学路を中心に、本校生徒に対する意識・要望のアンケート調査を実施した。実行委員はもちろん各クラス評議委員、校風局員等の生徒たちが割り当てにしたがい、放課後、一戸一戸訪ねてアンケートをお願いするものであった。調査戸数等は次の通りである。

アンケート実施日 六月二十日、二十一日

対象戸数 木曾福島町内、通学路を中心に本校から駅まで

約四百十戸

回収数 三百七〇戸（回収率 約九〇パーセント）

アンケート結果は予想以上に厳しいものであったが、それは六月二七日の臨時生徒総会において、全生徒に報告され「本校生徒のマナーの改善がなければ、ひのき祭の成功はありえないこと」を訴えた。

さらに実行委員会から全生徒による町内ゴミ拾いが提案され決定した。さつそく同日の午後、全校生徒、職員によるゴミ拾いを実施、一・五トンのトラックいっぱいゴミを集めた。

こうした生徒たちの努力に町内の人々から励ましの声があった。

③「ひのき祭を成功させることにより学校を変えよう」

しかし問題は、それだけでは片づかなかった。そうした直後、今度は実行委員の中から喫煙指導を受けるものが出てきたのである。委員会の内側からの問題であり極めて深刻な状況を引き起こした。再びひのき祭中止もあり得る事態に実行委員会は苦悩の色を濃くした。そうした中で委員会は、自らの問題としてこの問題をとらえ、まず全校の先頭に立つ実行委員の中にいる喫煙者を説得し、禁煙を約束させた。

さらに実行委員会では、あきらめかけていたひのき祭を「中止では何も変わらない。成功させることにより学校を変えよう」と結論づけた。そして実行委員長田沼利通を中心に再び準備に取りかかったのは、夏休みも終わった時だった。

準備期間は短くなってしまうが、生徒たちは必死に取組んだ。作り上げた企画書だけでも厚さ二センチメートルを越えるものであった。それをもとに地域に向けて「なんでも鑑定団」の鑑定品の募集の呼びかけ。鑑定品の事前審査の準備及び鑑定

士との打合わせ。鑑定会場の準備。町内PR隊の仮装行列の準備。二四時間ソフトボールのために一晩中照明をつかうので、杭の原地区の皆さんの了解を得るための戸別訪問。仮装カラオケの得点表示ランプの作成。クラス毎に制作を依頼した提灯等々、全員の生徒が準備にかかり、それに追われた。

この年の主な企画は次の通りである。

十月十八日（金）

放課後 ゲゲゲノ鬼太郎やお化けに扮したひのき祭PR

R隊が、駅前、アスク、農協前で必死に宣伝活

動実施。

十九日（土）

午前 開祭式、仮装カラオケ大会。手作りの得点表示

ランプが輝き会場を盛り上げた。

午後 二十四時間ソフトボール開始（翌日まで）。多

くの父母が炊き出しの協力。その後は応援団に変身。

二十日（日）一般公開、みんなの広場を林業棟前で開催

午後 「山林なんでも鑑定団」地域の方々も加わり会場
のアーリーナは満員。

二十一日（月）

午前午後 クラス劇発表。生徒の劇とともに職員劇

「必殺仕事人」（監督池田正、主演関島資浩、

出演職員多数）も好評

後夜祭 ゲーム、軽音楽、ファイヤーストーム、実

行委員一人一言。初めてフィナーレを飾る打ち

上げ花火。その感動の中、文化祭は終了した。

鑑定士の安岡路洋氏は、生徒たちの精一杯の準備・演出に感動し、次のような手紙を寄せた。

前略、この度貴校の「ひのき祭」に参加できましたことは、大変楽しい一日でした。ステージや演出に皆さんの努力が並大抵のものではなかったことを痛感いたしました。このようにすべて、あるいは人生もその気になれば道は開かれるものです。皆さんが焼いた炭、無事届きました。早速使用させていただきます。（以下略）
安岡路洋

またこの企画の提案者で、奥牧裕子とともに司会役をつとめた西村まさ子は「最後になるにつれて、会場が一つになっていくのが肌で感じられました」と、その感動を述べている。（『樹芸』第七号）

また、ひのき祭終了後のアンケートで、「今年度のテーマであった『ひのき祭大規模改修』は成功したと思いますか」との質問に、



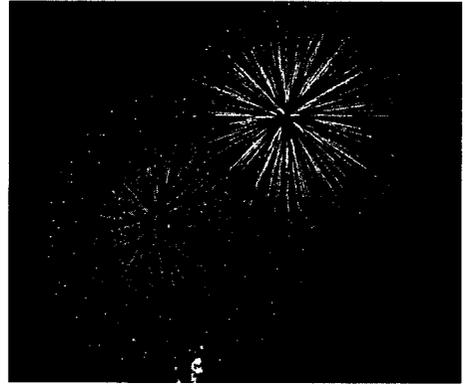
写8-51 ゲゲゲノ鬼太郎等に仮装したPR部隊、さあ出発だ!



写8-48 大規模壁画とはりぼて



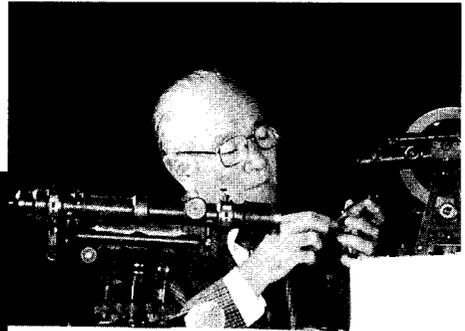
写8-52 仮装カラオケ大会。生徒が作った得点盤も好評



写8-49 ひのき祭のフィナーレを飾る打ち上げ花火



写8-53 24時間ソフトボール大会



写8-50 (上) 鑑定をする安岡路洋氏
(左) 山林なんでも鑑定団



はい 一九二人

どちらともいえない 六三人

いいえ 十三人

であった。また一・二年生を対象に「来年度も『ひのき祭実行委員会』が組織されれば、参加しますか」との問いには、

はい 九四人

いいえ 九一人

と回答し、半数以上が積極的参加を表明した。

これはひのき祭の成功と感動を、圧倒的多数の生徒が実感したと言っても過言ではない。しかしその背後には、前述の他に合計二五回に及ぶ実行委員会、しかも毎回二時間を越える話し合い、その時間だけでも優に五〇時間を越えるものがあった。

この年以後もこうしたひのき祭の取組みが、生徒たちを変え、大きな自信をもたらしていった。まさに第二七回ひのき祭は、生徒自ら「学校を変えよう」とする画期的な出発点となった。

④力強く歩み始めた生徒会

平成九年度は、北川文祥会長を中心とした実行委員会に前年度の成果が引き継がれていった。全員参加、全員協力を意味す

る「戮力協心（りくりよくきょうしん）」をテーマに取組んだ。そして次の三つメイン企画をたてた。

- 1、全国専門高校物産フェアを含む山林物産展
- 2、山林大運動会
- 3、クラス劇

全国専門高校物産フェア

特に『全国専門高校物産フェア』は、本校を含む全国の専門（職業）高校生の作品を紹介し、販売も行う新企画であった。あらかじめ全国の林業・農業高校、さらにインテリア科を持つ高校、一九一校に手紙で呼びかけ、それぞれの高校の生徒作品の出品または仕入れを依頼し、農産物を中心に販売しようという企画であった。

その結果、県内の農業高校はもちろんのこと、北は北海道の美幌農業高校から南は沖縄県の北部農林高校まで、四四都道府県の八九校から協力を得ることができた。

当日は、旧体育館に各校の学校案内パンフレット、木製品・製図などの生徒作品が展示された。さらに各校で作った各種のジャム、缶詰、シロップ漬け、マーマレード、乳酸飲料、トマトジュース、かしわ味噌、スッポン味噌、手作りクッキー、シクラメンの鉢、黒糖などの食品。また木工品として金魚ねぶた、鍋しき、小物棚、電話台、花台などが販売され、盛況であった。



写8-55 第1回全国専門高校物産フェア（平成9年）

写8-54 平成9年度ひのき祭の開祭式。そろいのトレーナーを着た実行委員たち



またプールは、生徒の発案、保護者の協力を得てマスの釣り堀に変身。その側では、取り立てのマスのバーベキュー。この企画は親子連れや子供たちの人気をばくした。インテリア科では、例年三月に行っていた「インテリア科生徒作品展」を、ひのき祭に実施した。一・二年生の作品が即売されるといふことで多くの人々が集まった。

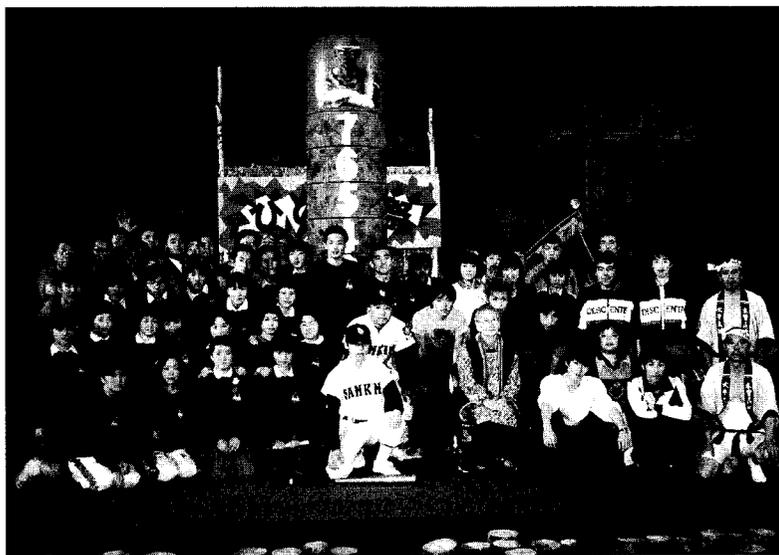
⑤ 日本一の文化祭へ

平成十年、野口陽一郎会長のもと、次第に自信と力をつけた実行委員会は、「まだまだ甘いぞ！山林改造計画98」チャレンジャー」をテーマに取組んだ。一昨年の「文化祭大規模改修」を受けて、ひたむきな努力の連続であった。

そしてメイン企画として、テレビの人気番組「筋肉番付」に出場のチャンスを得た。それを担当をした伊藤絵美（三年）はその時の模様を次のように語る。

「あのー私達の文化祭に来て頂けないでしょうか。」それは、一本のTBSへの電話で始まった。

文化祭に筋肉番付を呼んでみたい。そんな一年前からの私達の夢がついに第二十九回ひのき祭で実現した。「だるま7地方巡業IN木曾」という一つのドラマ。このドラマは、山林の生徒全員で作上げた過去に類例のない文化祭であった。



写 8-56 筋肉番付に参加した皆さん（平成10年）（中島瑞穂生徒会顧問蔵）

会場となったアリーナに足を踏み入れた時の大歓声。今まで非協力的だった生徒がこの時ばかりは出場者達と一致団結している。そんな声援は私達筋肉番付係の数ヶ月の苦しみを吹き飛ばしてくれるような気がした。最後の最後のシーンまで、その声援は消えることはなかった。そんな中、考えてもみながっ

たパーフェクトが二組も生まれた。最終的には百二十万円の賞金。全校の熱意と一致が獲得したものだ。そして十月二十四日、いよいよテレビ放映の日となった。

「日本一の文化祭」

そんなタイトルが私の目に飛び込んできた。私達、文化祭実行委員と全校生徒、そして先生達が一丸となって作り上げた最高で最大の文化祭。日本一の文化祭といわれた第二十九回ひのき祭は番組と共に幕を閉じたが、山林高校の歴史の中、そして私達の心や目の中にいつまでも焼きついていることだろう。

ありがとう仲間達。そして足もないのに踏んばってくれた金剛君にも心からの感謝を込めて。（『樹芸』第9号、本章扉参照）

見事なドラマ

生徒会顧問の五明教諭は「そして本番。見事なドラマだった。まさか生徒があれほど協力的で、真剣に応援してくれるなんて。あんな姿は初めて見た。（中略）『筋肉番付』は全校の協力がなければ絶対に成功しない企画だった。それを見事に成功させた。まさに全校生徒のパワーが爆発した瞬間だった」と回想する。

（『樹芸』同）

この模様は、土曜日のゴールデン時間に全国放映され、在校生、父母、職員だけでなく多くの卒業生たち、地域の方々に勇気と希望を与えた。

また展示発表では、地味な企画ながら「いいひと」が取組ま

れた。これは全校生徒、職員が、お互いのよいところを探し合って、その似顔絵とともにはりだすものであり、好評であった。

さらに前夜祭の仮装カラオケ、第二回全国専門高校物産フェア、釣り堀、インテリア科作品展、クラス劇、後夜祭など充実したものになってきた。名物となった花火を見上げ、多くの生徒達が感動を味わった。

⑥ 来場者ついに一〇〇〇人突破

平成十一年、榎田美由貴会長は、「レッツ感動！」をテーマに、ひのき祭一般公開の来場者一〇〇〇人突破を目標に掲げた。

そのメイン企画として、新企画の「ひのきバザールでござーる・フリマけ笑顔山林フリーマーケット」。さらに二年後に控えた、本校創立一〇〇周年をめざした「山林アンケート 未来にエールを」、本校生徒の学校生活をまとめた「山林高校青春白書」を打ち出した。

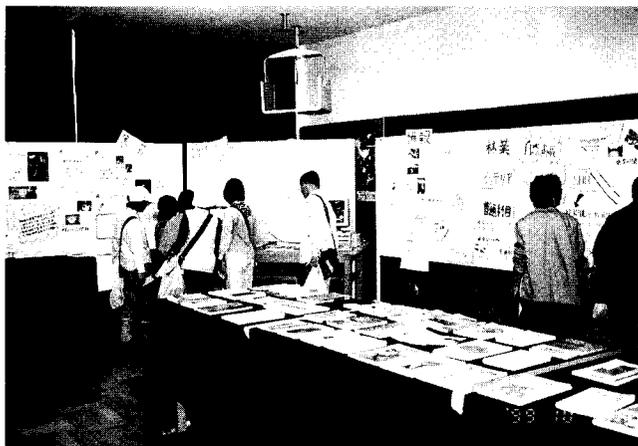
特に「ひのきバザールでござーる」は、PTAの全面的協力を得ながら、バザーの品物を郡下全域から集めようというもので、全校生徒が呼び掛けのチラシを配り、一戸一戸訪ねて集めてまわるもので、五〇〇〇点を越す品物が提供された。当日旧体育館は、バザーの品々であふれかえり、目標の一〇〇〇人を越す、一三二五人の来場者でこった返した。フリーマーケット

会場になった管理棟前の駐車場は幾つもの店、また林業棟前にかけて、各クラスの出店、みんなの広場係の余興などがあり、かつてないにぎやかな文化祭となった。



写8-57 大盛況だった「ひのきバザールでござーる」のビッグバザー会場（平成11年）

その一方で、平成十三年の創立一〇〇周年を控えて、自分たちのあり方を再度見つめなおそうということで、これまで一戸一戸訪ねての地域アンケートを実施した。その結果は模造紙に書かれ教室いっぱいには貼りだされ、隣接する「山林青春白書」の会場とともに、多くの来場者が足を止めた。



写8-58 「山林青春白書」発表会場（平成11年）

その白書の一部を次に紹介する。

「山林青春白書」山林高校は必要ですか
通学路住民アンケート（回収率七五・三％ 三四二人）

（質問）山林高校は地域にとってこれから必要ですか。必要な

いですか。

・必要である

三十三人（九一・五％）

・必要ない

四人（一一・二％）

・どちらとも言えない

六人（一一・八％）

・返答なし

一九人（五・五％）

その理由として、数少ない全国的な専門高校であり、山や森造りに必要な学校であることをあげる人が多かった。

『山林青春白書』

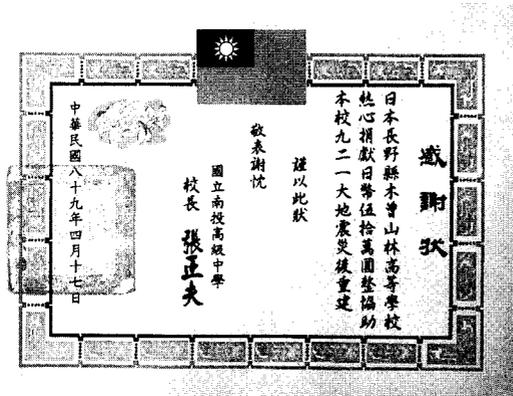
この活気に満ちたひのき祭を見学した、一町民の方から次のような手紙を学校にいただいた。

とにかくあの文化祭には感動しました。学校全体にパワーがみなぎり、皆さんの文化祭に対する熱い思いをひしひしと感じました。数日たった今でも受けた感動と皆さんの暖かい思いは消えません。もちろんバザーの規模の大きさにも驚きましたが、一つ一つの展示にもユニークさと一生懸命さが伝わってきました。そして私が最も感動したことは、「木曾山林の未来」へ向けての企画展示でした。良いも悪いも含めて真正面から木曾山林を見つめる姿勢に拍手を送ります。木曾山林を愛し、大切にしていこうという意志が、私には強く感じられました。文化祭をみて、私がこんなに心を揺さぶられたのは初めてです。いろいろご苦労があったことと思います。本当に有り難うございました。いつまでも拍手を送ります。

一町民より

心暖まる手紙であり、生徒たちのひたむきな努力の労をねぎらい、さらに大きな勇気を与えるものであった。

なおバザーの収益金は、五五一、五一〇円あったが、その内五〇万円は、同年九月に起こった台湾大震災の義援金として寄付された。翌年十二年、そのお金を受け取った台湾中部の国立南投高級中学（日本の高校に相当）より感謝状（写8-59）が送られた。



写8-59 台湾中部にある国立南投高級中学からの感謝状

二、生徒会諸活動の活性化

1、生徒会誌『樹芸』の創刊

また年度末には、それまでの「木曾山林高校新聞」（タブロイド判）に代え、新聞委員長の新美保が編集委員長になって生徒会誌が創刊された。A5版四〇ページの小冊子紙で、一年間の活動やそれを示す写真、ひのき祭の各係の感想、生徒会や部活動の成績や感想、クラス紹介などが盛り込まれた。そして校歌三番の冒頭「乞う見よ我等が樹芸の力」から「樹芸」をとり題名とした。生徒会長の東山匡人は自ら表紙を描き、さらに「生徒会誌をつくることは今年が初めてですが、これから先ますます良い会誌になることを願っています。」と『樹芸』の中で述べ、期待を表明した。

これは開校時の校友会報に匹敵するものであり、大きな意味を持つであった。その後、東山や新美らの期待通り、生徒会の機関誌として年々内容も充実し、平成十年の九号は一〇〇ページに及んだ。

その内容を目次により概観してみたい。

『樹芸』第九号（平成十年度）

巻頭言 生徒会長 野口陽一郎「生徒会長だった一年間を振り返って」

り返って」



写 8-63 屋台やフリーマーケットが並びにぎわう
広場（平成11年）



写 8-64 大橋パン店のご主人大橋弘義さんが、仮
装カラオケ大会の審査委員長「さあ審査
結果を発表します」（平成12年）

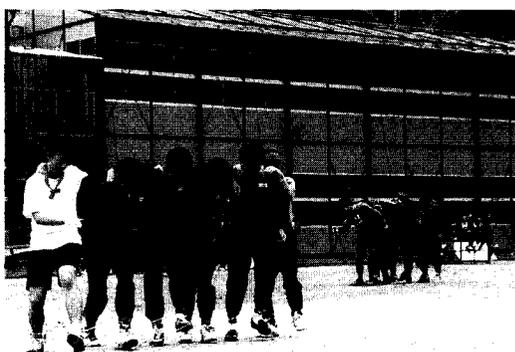


写 8-65 運動会、大玉送り、力を合せて
（平成12年）

ひのき祭 スナップ



写 8-60 職員劇もなかなか好評でした（平成 2 年）



写 8-61 運動会、横に走るムカデ（平成 5 年）



写 8-62 軽音ライブは毎年好評（平成 8 年）

生徒会長 榊田美由貴「理想の生徒会」

学校長 永田勝男 「今、自分を見つめる」

回想 一年間の思い出(各報告)

入学式、林業科総合実習、開校記念日、芸術鑑賞、

柔道部県大会、中間・期末テスト、スポーツ大会、

競歩大会、修学旅行、同和教育、三年研修旅行、

西表島の研修、就職について、進学について、

インテリア科で学んだこと、林業科で学んだこと。

ひのき祭(各係の報告)

実行委員長、副実行委員長、開祭式、物産展、筋肉番

付(TV)、いい人、仮装カラオケ、クラス劇、後夜

祭、広場運営、装飾・受付、PR、校内外管理、放送、

会計、ひのき祭顧問、似顔絵で発見「さんりんのいい

人」、筋肉番付賞金獲得者、ひのき祭を報じた新聞・

広告、ひのき祭来客数、ひのき祭実行委員名簿。

平成十年度を振り返って(各局・委員会の報告)

副生徒会長、評議委員会、監査委員会、書記局、財務

局、文化局、体育局、図書委員会、新聞委員会、保健

委員会、選挙管理委員会

平成十・十一年度生徒会役員名簿

部・同好会を振り返って(各部・同好会の報告)

柔道部、女子バレーボール部、男子バレーボール部、

バドミントン部、男子バスケットボール部、卓球部、

野球部、男子ソフトテニス部、女子ソフトテニス部、

スキー部、剣道部、美術部、軽音同好会、サッカー同

好会、ボランティア同好会、料理同好会、山岳同好会、

パソコン同好会、きのこクラブ

部活動大会結果

平成十年度生徒会行事結果

これが私たちのクラス

創刊以来、担任の似顔絵とともに各クラスの紹介。

卒業生一人一言

卒業する三年生全員の短いコメント。

卒業生へ贈る言葉

三年生の担任、副担任のはなむけの言葉。



写 8-66 生徒会誌『樹芸』

編集後記

(その他、各所に写真、生徒たちのカットをはさむ。)

こうして見ると、生徒会活動の報告となっており、活動の総体が伺え、記録としても重要な価値をもつものである。

2、スキー教室

平成元年度(一九八九)まで、冬季スポーツ大会として、二月中旬(三年生の自宅研修中)に、室内でできる球技を中心に、一・二年生全員で、一日かけて行われていた。しかし、町営の「きそふくしまスキー場」が、昭和六二年(一九八七)黒川の奥にできたことから、極めて簡単に本校でも利用できるのです。その日をスキー教室として行うことを決定した。そして翌二年度の冬季(同三年二月二十日)に初めて実施された。

一・二年生全員参加で、生徒会行事として位置づけられた。朝バスで、スキー場に向かい、午前九時から午後三時まで充分楽しむことができた。当初は、生徒のスキー技術に応じて級分けをし文字通り、職員がついてスキー技術の指導をしたり、スキー部や職員による模範スキーなどを行ったりして、その向上を目指した。しかし、スキーの上手な生徒も多く、次第に自由滑走になり、終日スキーを楽しむものに変わっていった。今までの室内のスポーツ大会に比べ、戸外での運動はのびのびと



写8-67 スキー教室(平成7年2月)

行うことができ盛り上がった。

しかし、その反面、寒さや装備の大変さ、体調を崩しやすい季節であることから、当日欠席する生徒が目立つようになり、スキー教室をどうするか、生徒会部会、職員会で話題にあがった。そのような中、新たに生徒会主催で「三年生を送る会」が、平成六年度末から企画されるようになったため、同十年度から学年行事に変更された。

その後、学年行事として同十二年二月、一学年が実施した。

3、三年生を送る会

平成七年の執行部が前年十二月選出された後、日光天土新会長の提案で「三年生を送る会」が実施されることになった。卒業式前日の三月三日、執行部全員による和太鼓（山林太鼓）の演奏が始まった。短期間の練習でうまくいかなかったものの、その後は思い出の映像、ゲームや歌、最後は正副担任の励ましの言葉で結んだ。

これ以後、この「三年生を送る会」は新執行部の初めて取組む大きな行事として位置づけられ、恒例化していった。

十年三月からは、卒業式当日、式後に行われるようになり、父母を交えて、卒業生の三年間を締めくくるにふさわしい感動的な会になった。

十一年度卒業式に行われた様子を次に示す。

三月六日「三年生を送る会」卒業式終了後、約一時間

在校生から卒業生に事前にはリボンの贈呈、全員胸にリボンをつけて卒業式に臨む。式終了後十分間の休憩後、いよいよ開始。

司会役の女子生徒二人登場して、先ず卒業生や保護者にインタビュー。軽妙な進行の中に卒業生の思い出が次々に語られ、特に元部活顧問の手紙も披露された時には、涙ぐむ場面もあった。次は三年間の思い出のビデオ上映。入学当時の全員の写真が登場しあちこちで笑いが起こる。そしてメイン映像はひのき祭、感動を新たにした模様。次は担任の先生とクラスの生徒へ

のインタビュー、やはり話題は三年間の思い出。次は記念品の贈呈。卒業生からは在校生へテントの贈呈があり、在校生からは卒業生全員に、それぞれ認印贈呈があった。次は先生方の歌で、今年の歌は久しく歌われなくなった、本校の応援歌「勝利」の合唱。最後は卒業生代表の挨拶があり、退場する卒業生を全員の拍手で送った。

卒業生だけでなく、在校生、父母、職員にも心に残る感動的な会となり、校内のあちこちで「よかった」の声が聞かれた。内山ちひろ会長を中心にした新執行部の企画力、実行力が示さ



写8-68 「卒業生を送る会」で応援歌を歌う山林女子応援団（平成13年3月）

れた会となった。

4、ゴミ問題の解決に向けて

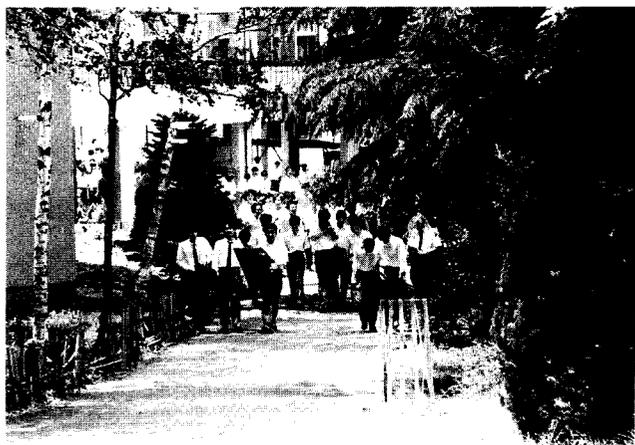
かねてより本校生徒の通学途上でのゴミの投げ捨てが町内で問題とされていた。平成六年五月、伊藤裕樹会長ら執行部は、黒川渡のダム横の歩道にゴミ箱を設置し、執行部員が交互に回収にあたった。その後校風局に担当が代ったが、現在も続けられている。また山本仁校風局長らが全校に呼びかけ、校風局を中心に、十数名しか集まらなかったが、通学路のゴミ拾いを始めた。

しかし前述の通り、平成八年六月、新居健太郎会長を中心としたひのき祭実行委員会では、全校に参加を求めて町内のゴミ



写8-69 黒川渡ダム横の歩道に生徒会が設置したゴミ箱

拾いを実施した。これ以後、今日まで毎年二回ないし三回の通学路を中心とした町内一斉ゴミ拾いを、生徒会の重要な活動として、全校に呼びかけ実行している。これにこたえて、毎回全校生徒の約三分の二の生徒が参加している。



写8-70 さあ袋をもってゴミ拾い。毎回多数の生徒が参加している

5、主な生徒会行事

一年間の主な生徒会行事をあげると次のようである。

四月・対面式 新入生と二・三年生との初めての対面式

・生徒会説明会 新一年生を対象に生徒会及び各部・同好会の説明会。入部・会を勧誘するためにそれぞれ趣向をこらした説明会になることが多かった。

五月・前期生徒総会 一年間の活動計画、予算、決算の承認等。

・壮行会 第二土、日曜日を中心に全国高校総合体育の中信予選が開催されるので、その大会に出場する選手たちの壮行会

六月・強歩大会 本校から出発して幸沢一周（途中道路工事のため幸沢で折返し往復）約二二キロメートルを、歩いたり走ったりして速さを競うもの。個人（男女別上位者）には賞状とメダルが与えられた。またクラス全員の順位の平均を争うクラス対抗になって盛り上がった。

・町内一斉ゴミ拾い

七月（年により九月）

・スポーツ大会

本校の施設だけでなく、町民体育館やグラウンドを借りて、全校でスポーツを楽しんだ。主な種目は、バレーボール、バスケットボール、ソフトボール、バドミントン、時によりサッカー、卓球等が行われ、全生徒が参加して熱戦が繰り広げられた。

各種目とも三年生が強かった。

九月・町内一斉ゴミ拾い

十月・ひのき祭

十一月・新役員選出 次年度の生徒会役員として生徒会長、副生徒会長（二名）、正副評議員長、正副監査員長の合計七名を選挙にて選出。校風局長などの他の役員は、新生徒会長が指名。

十二月・後期生徒総会 一年間の活動の反省まとめ。次年度新役員の承認。



写8-71 それ行け！強歩大会（平成7年6月）

・新執行部発足 新生徒会長を先頭に活動開始。

二月・スキー教室（平成三年から同十年まで）

三月・生徒会誌『樹芸』の発行。

・図書委員会誌『ごぼく』の発行

・「三年生を送る会」

三、部活動の活性化

1、相撲部の活躍 二回の全国ベスト16

相撲部は、各年度、団体・個人とも活躍している。昭和四九年から平成十一年までの二五年間のうち、県大会優勝十四回、準優勝三回、三位一回、個人優勝者十六人、準優勝者十一人、三位者八人。新人戦においては、五三年から十一年までの二二年間において団体優勝十六回、準優勝六回、個人戦優勝者十五人、準優勝者九人、三位者十三人と常に上位を占めた。

特に、昭和六一年から平成五年まで団体八連勝は他を寄せつけなかった。そのなかで平成元年全国高等学校新人大会（高知市）において団体ベスト八は本校相撲部始まって以来の好成績であり、翌年二年、三年と全国高等学校総合体育大会においてベスト16に進出したこともおおいに誇るべき成績であった。

こうした成績を見込まれ、田島大助（89回・東洋大学）・尾羽林英樹（89回・東京農大・現 本校教諭）の二名が大学に進



写8-72 平成元年3月全国高等学校相撲新人大会（高知市）ベスト8進出選手及び監督・コーチ
前列右より田島大助、佐幸寛之、赤羽清吉
後列右より越秀寿、平林正コーチ、尾羽林英樹・滝沢柿崎庫之助監督
（柿崎庫之助教諭蔵）

学し、それぞれの大学において選手として活躍。卒業後は木曾に帰り選手として活躍しながら後輩の指導を行っている。

これらの努力や実績が実り、平成八年、九年と田島大助は国体成年Bの部において、個人優勝二連覇という快挙、十一年では国体団体成年Bの部四位入賞（田島大助・尾羽林英樹・滝沢誠・90回）と、一層本校相撲部の名をあげるようになった。

しかしながら競技人口の低下とともに、相撲部入部者が少なくなり、部から同好会へと転落、相撲部消滅寸前となったが、関係者の支援もあり、ようやく持ち直すことができた。

5、地味な努力

毎日の厳しい練習を重ねる野球部、塚田竹清教諭を迎えて活性化した卓球部、男女バレーボール部、剣道部、平成十二年中信大会ベスト8に進んだ男子バスケットボール部、サッカー部、

女子ソフトテニス部など、地道な努力を重ねている。

中には公式戦で一勝もできずに卒業していく部員もいるが、あきらめずに、部活動に打ち込んできた姿は胸を打つものがある。

●コラム 珍種 ヒノキの俵シボ発見

裏山演習林に突然変異によって出現したヒノキの俵シボがある。これは米俵が縦に連なっているように大きくくびれていて、磨丸太として床柱に利用される。

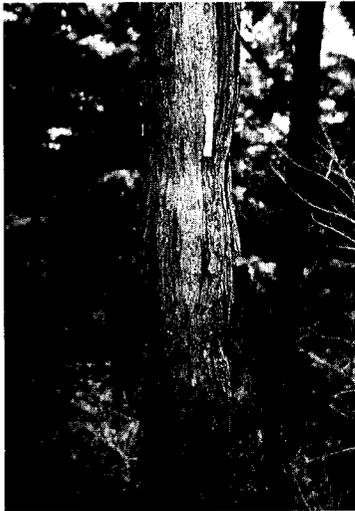
農林水産省の森林総合研究所の育種担当者によると、どのぐらいの割合で出現するか不明であるが、ヒノキの俵シボは極めて珍しいと言う。

平成七年秋季総合実習、三年経営コースの生徒四〇名が、二人一組になって間伐をおこなった。実習途中でちょうど昼食時間となった。昼食後一休みをしていたとき、ある生徒が「でこぼこの変な木がある」と目の前の一本のヒノキを指摘。偶然にもこれが俵シボの発見である。

この木の周りは大変混み合い、成長もそれほどよくないので、この昼食時間がなかったならば間伐される運命

にあった。

この木は平成十三年三月現在、胸高直径約二〇センチ、樹高約十五メートルの大きさになっている。



写8-74 大きくくびれている
ヒノキ

6、活発化する文化系部活動

文化系の部活では、顧問野口牧子実習助手（91回）の指導する美術部は各種コンクールへの応募、ひのき祭での作品発表など活発に活動を続けている。

また軽音楽同好会もひのき祭だけでなく、木曾高校などトライブを企画し、積極的に発表活動を行うなど、生徒たちに人気の同好会である。

平成十二年同好会で発足、翌年、部に昇格した吹奏楽部も、顧問都筑勝教諭（84回）指導のもと十数年ぶりの復活であり、野球の応援、校歌演奏など新しい空気を本校にもたらした。

なお、この吹奏楽部復活に当っては、楽器の購入・整備などに、東京蘇門会長の平田利夫（44回）の大きな援助があった。

7、自信と誇りを取り戻した生徒たち

「ひのき祭を成功させることで学校を変えよう」として取り組んだ文化祭であるが、それは生徒会活動全般にまで及ぶものであった。そしてそれらの活動に直接携わった役員はもちろん、そうでない多くの生徒達も、やればできるという大きな自信と誇りを取り戻したのである。毎年三月には多くの生徒たちが「山林高校へ来て本当に良かった」と言って卒業していった。

第六節 充実する母校

一、九〇周年記念事業と教育基金の創設

一〇年目ごとに学校発展を願う記念事業

平成元年五月の蘇門会総会で、本校が一〇年目ごとの節目に、学校発展を願って記念事業が行われてきたので、平成三年（一九九一）には、九〇周年を迎えるので記念事業に取組むことを決定した。

さっそく検討が進められ、十一月には蘇門会・学校・PTAからなる実行委員会が結成され、次のような事業内容と募金計画が決められた。

〔事業内容〕

1、環境整備 ①庭園整備

②教育環境（器材・器具の購入）整備

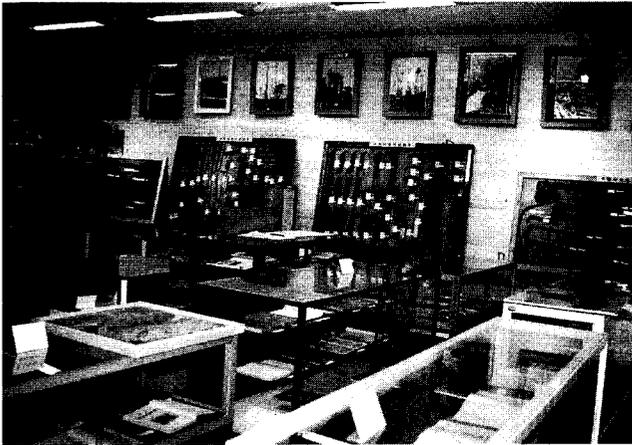
2、体育振興・教育文化基金設立・蘇門会運営基金の充実

3、会員名簿の発行

4、記念式典

〔募金計画〕

目標額 三、〇〇〇万円



写 8-75 新しい標本室。林業や本校の歴史に関する貴重な資料ばかりである

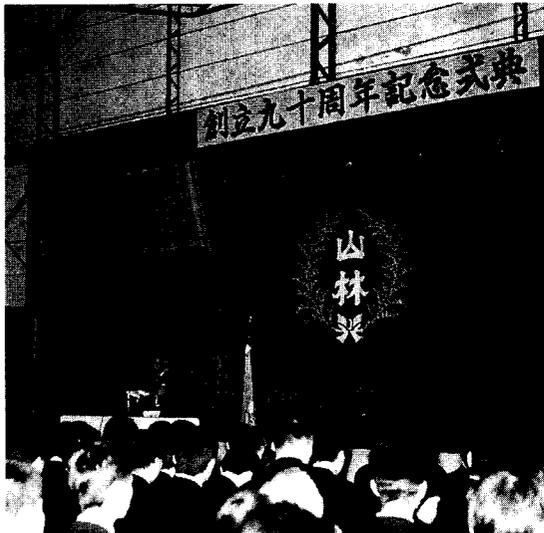
そして短期間ではあったが、精力的に取組まれ実行された。環境整備では、平成六年に竣工した林業体育特別教室棟の中に、林業標本室が作られたが、その中の整備にその予算が当てられた。こうして前述の江畑猷之允第二代校長の構想以来、集められた資料・標本などが整備・陳列され、極めて貴重な資料館が出来上がった。

教育基金の創設

また体育振興・教育文化基金は、記念事業の最も重点をおいた事業で、二〇〇〇万円が当てられた。これはその利子を本校の教育活動に有効に援助しようというものであった。

バブル経済破綻後は金利の低下に苦しんだが、しかし、野球部のピッチングマシン購入、生徒会木曾サミット事前学習のための郡内視察交通費補助、フィリップピン植林ボランティア参加者への補助、学校案内ビデオ作成など、以後極めて有効にこの基金の利子が使われた。

さらに蘇門会員名簿の発行もされたが、庭園整備は、林業棟



写 8-76 体育館において盛大に行われた90周年記念式典。挨拶する日野蘇門会長

などの校舎改築後とされた。

そして六月二日、旧体育館いっばいの参加者を得て記念式典が盛大に挙行された。

二、林業体育特別教室棟の完成

①講堂・林業棟の老朽化

昭和三八年の校舎全面改築からはずれて老朽化著しい講堂、当時予算面で厳しかったこともあって木造モルタル造りで建てられた林業棟、いずれも老朽化著しいので県へ改築を要請することになった。

その際、耐用年数はきていないものの傷みが目立つ第二林業棟も併せて改築し、校地の有効利用を図りたいとの要望もでた。これを受け昭和六二年（一九八七）より学校運営委員会において検討が始まった。さらに林業資料館の新設も併せて検討することとなった。

そして、こうした校内での検討をもとに県当局との厳しい折衝が始まった。以後、紆余曲折を経ながらも、平成三年冬には実施設計が始まり、林業棟・体育館・林業資料館・必須科目となる家庭科の施設など全てを含む四階建ての校舎建築が行われることになった。

さらに工事に伴って必要となるプレハブ校舎についても同時

●コラム 蘇門のきずな 大先輩を訪ねて

沖縄近代林業の父と呼ばれた園原咲也（1回）先輩の墓参をしたい、という日野文平蘇門会長（当時・38回）らの強い意向で、平成八年（一九九六）五月末沖縄訪問が実現した。

副会長の皆さんや本校職員と共に遠くでかけた沖縄は、梅雨の真っ最中、日野会長自身も喉の手術の後で、話をするのもご不自由であったが、その強い思いはニライ・カナイの園原先輩の御霊に通じたであろう。



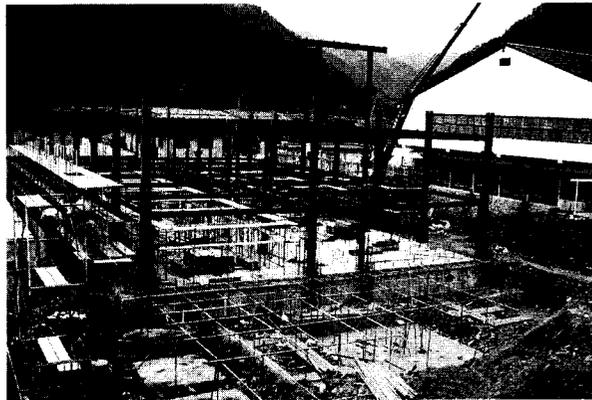
沖縄県国頭村 園原繁氏宅前にて
琉球大学助教授 元蘇門会副会長 新里孝和 小瀬川秀次（39回）
園頭村経済課長補佐 金城 茂 園頭村経済課長 蘇門会々々長 園頭村経済課長 日野文平（38回） 宮城政健 園原咲也（1回）三男 蘇門会副会長 園原 繁 二浦清一郎（43回） 同 興棟 蘇門会副会長 園原シヅ 村井定男（39回）
（三列目右より）
木曾山林高校教諭（林業科主任） 遠山善治
木曾山林高校教諭 手塚好幸
平成八年六月一日



写8-77 林業棟お別れ会 旧第1林業棟前にて
(平成4年7月4日)

に検討が進められた。
四年七月四日には取り壊しとなる林業棟との「お別れ会」がゆかりの旧職員も出席して盛大に行われた。
校舎の解体は九月から行われ約一月で終了した。林業関係の授業は一年半にわたり、グラウンドに造られたプレハブ校舎と第二林業棟で行われた。そのためグラウンドが狭くなり体育の授業や部活動に不便をきたし、町営グラウンドなども借用した。

平成四年秋、日野蘇門会長ほか関係者が出席して起工式が行われた。



写8-78 始まった林業体育特別教室棟の工事

その後工事は順調に進み、平成六年三月には完成し県より引き渡しが行われた。

広々とした施設

一階には加工・土木・機械の各実習室と生徒更衣室、二階には経営・製図・情報処理・職員室など他に例のない広々とした

施設となった。

標本室の整備

そして我が山林が誇る貴重な資料を展示した標本室は壁は無節の檜板が使われ、床から天井まで届く大きなガラス展示ケースなどを備えた立派なものとなった。また、標本室には九〇周年記念事業の一環として約百六十万円でビデオプロジェクトとアルミスクリーンが設置され生徒の集会や来校者の見学の際に使われることとなった。

これにあわせて約三百万円の予算と一年以上を費やして「木曾林業史」、「学校案内」の二本のビデオソフトも作成した。

充実した施設・設備

製図準備室には卒業生が活躍している東京の東武計画株式会社より寄贈されたドイツカールツァイス製の航空写真図化機が設置された。これは全国の高校では初めてのことであった。

三階はこれまた信州カラマツ材で壁をはり、木材をふんだんに使用した山林にふさわしいアリーナ（ステージ付）と家庭科関係の実習室・準備室、そして永年の願いだった体育研究室が配置された。

四階はアリーナの吹き抜け部分と、個人レッスン室まで備えた音楽室、林産製造室がある。林産製造室には希望よりは小規模となったが、高圧蒸気滅菌室、冷暖房装置が付いた培養室・

発芽室が設置された。

また、全館に暖房用ファンヒーターが県下公立高校ではじめて導入された。本校ではじめての四階という高い屋根からの落雪（水）を防ぐために北側雨樋には電熱ヒーターが配備された。

竣工式典と校旗の贈呈

平成六年六月二二日、完成祝賀式典が盛大に挙行された。

この改築に要した事業費は本体工事八億六千万円、付帯工事をあわせると十億円を超える大事業となった。校舎の全面改築の際は三分の一は地元負担であったのが、現在はすべて公費負担になったことは時代の流れを感じる。充実した施設設備の中で、教育成果が期待されている。

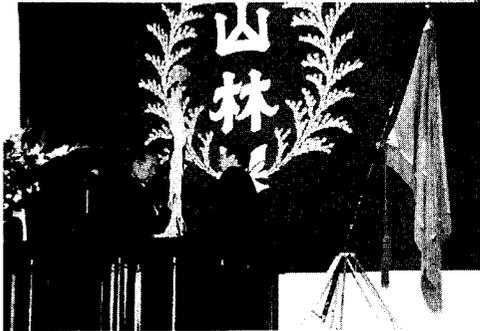
また、この式典に合わせて蘇門会から本校に新たな校旗（二代目）が寄贈された。卒業生の熱き思いのこもった新校旗は本校のシンボルとして活躍している。

旧校旗は大正四年に制定・製作され、本校の象徴として生徒・職員とその運命を共にしてきたが、八〇年をへて色あせ傷みも激しくなってきたので交替となった。現在標本室で静かに休んでいる。

また七年二月には、林業科にゆかりの旧職員も駆けつけて「新林業棟こんにちわ会」が行われすばらしい施設の完成を喜んだ。



写 8-79 林業体育特別教室棟竣工式で挨拶する梶原満雄校長



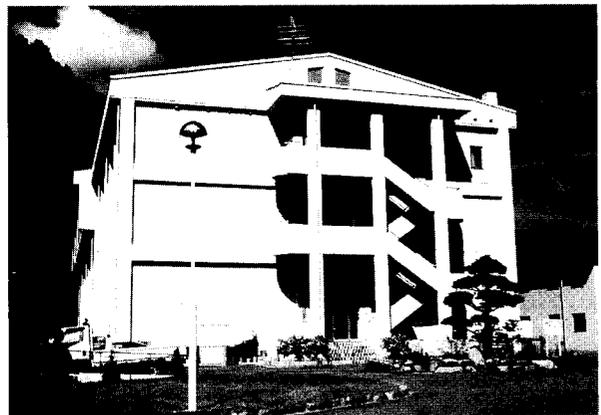
写 8-80 新校旗の贈呈。日野蘇門会長から梶原校長へ

三、寄宿舎（望岳寮）の改築と寮生活

平成元年（一九八九）八月、寄宿舎（望岳寮）横の県道の拡張工事にともない、寄宿舎が全面改築され、翌年九月竣工した。今までの寄宿舎に比べると一回り小さくなったが、それでも最大一室四人、十一部屋あるので四四人は収容可能である。

風呂はスイッチ一つで沸き、電気洗濯機や乾燥機を備え、食堂には冷蔵庫やテレビもあり、快適な寮になった。

しかし、入寮生は次第に減り続け、毎年一〇名を割る状況に



写 8-81 平成 6 年に完成した林業体育特別教室棟

●コラム カツラの木、今は

旧講堂入り口に立つカツラの大木（樹齢七十年）は、本校のシンボリックな存在であったので、改築に合わせて、そのまま校舎の中へ取り込むことが検討された。しかし基礎工事で根がだめになってしまう恐れがあり、やむなく伐採することとなった。

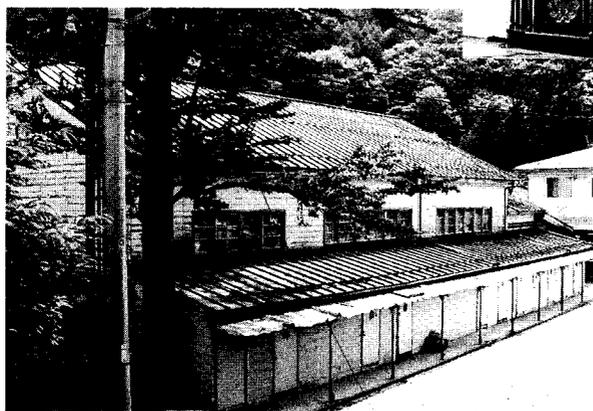
伐採後、この木をどんなかたちで残すことができるか検討した結果、式典用の講演台に加工することとなった。原木の伐採と製材は当時のPTA役員のご協力をいただいた。また、製品加工はインテリア科職員が中心となり、林業科生徒（木材加工を選択した者）も加わって行われた。正面には校章を柿崎庫之助教諭が彫り込んだ。こうしてカツラの木は再び本校のシンボルとなった。

後年行われた全国林業研究会など多くの式典に使用され、参加者から絶賛されている。



写8-83 完成した講演台のお披露目

写8-84 旧講堂とカツラの木



●コラム 原田屋さん

山林の生徒や職員であれば、だれでもがお世話になっているのが原田屋さん。開店は大正一〇年ころで、以後職員や生徒、とりわけ寮生とのつながりは今日まで続いている。

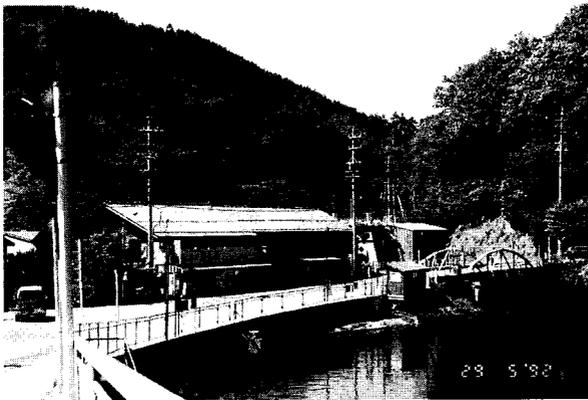
ご主人田中勝さんと奥さんのそめ子さんの思い出を紹介する。

戦前、寮生は空腹をしのぐため、夜遅くお菓子を買ってきた。しかし、お金がなくなると、八十銭ほどの借用书をもってきて買っていく者もあらわれた。中には支払いが停滞する者もいたが、先代が寮へ書出し（請求書）を持ってとりに行くこともあった。それでも親から離れている寮生の心情を察すると、取り立てにくかった。

昭和三十年代のはじめ、生徒はノートがわりにワラ半紙を多く買った。また寮生は、消灯後二十円ばかりを握ってよく食パンを買いに来た。当時は食パン一斤を四枚切って十五円、五円分の砂糖をつけて売った。他に毎朝、手紙当番の一年生が、切手を買いに朝がけされたりと、寮生とのドラマは尽きることがない。

当時を懐かしんで卒業生が訪ねてくるという。先生方も大いに利用され、中にはコップ酒の常連で立ち寄られる方もいたという。

いつも山林を暖かく見守り、生徒と職員の胃袋を満たし続けているのが、黒川渡のコンビニ、われらが原田屋さんである。



写8-85 ダム湖畔にある原田屋さん

なった。例えば平成十二年度は六名、十三年度は九人で、県外生はいない。いつも一〇〇名ほどの寮生がいたという時代から比べると、これも隔世の感がある。



写 8-82 現在の望岳寮

四、校舎の大規模改修、他

平成八年（一九九六）に本館、十三年に管理棟の床、天井の張替え、外壁の塗替え、窓枠のアルミサッシ化、耐震強化などの大規模改修が行われ、校内が明るくなった。

新型パソコンの導入、インターネットのホームページ開設など、新しい時代に応じた施設・設備の充実がはかられている。

五、二十一世紀に向けて 創立一〇〇周年記念事業

1、創立一〇〇周年記念事業の決定

本校創設一〇〇周年記念事業については、既に九〇周年を迎えるころには、蘇門会はじめ校内で話題にされ始めていたが、具体的な取り組みに移ったのは、平成九年からである。

即ち平成九年一月準備委員会の開催を手始めに、以後実行委員会が組織され、事業内容の検討が進められることになった。そして一〇年七月蘇門会総会では、記念事業計画と八〇〇万円の募金目標を決定し、役員及び今後の日程について確認された。

この事業は、一〇〇年という大きな節目を迎え、一世紀にわたる本校教育を振り返り、さらに二十一世紀における母校の存在意義を確認し、ますますの発展を期すものである。それと同時に学校を支えて下さった多くの方々に感謝の意を込めて、地域に貢献する事業を含む画期的なものであった。

こうして蘇門会・学校・PTAが一丸となって記念事業の準備が進められた。

2、記念事業の内容と進捗状況

①蘇水会館（教育振興会館） 平成十三年五月十九日竣工



写 8-86 平成13年 5月に竣工した蘇水会館
(教育振興会館)

・木造モルタル二階建

延床面積一八四・二四平方メートル

・一階 書籍を主とした資料保管室及び閲覧室

一〇〇周年記念誌の編集に使用した資料を含む校内に残る諸資料・図書、林業関係図書等の資料の収納。

・二階 インテリア科作品展示及び収納室

インテリア科生徒及び卒業生の作品の常設展示、及び収納保管。

この完成により、林業科の標本室と合せて、わが国でも極め

て貴重な林業・インテリア教育資料センターが出来上がることになった。これは生徒の教育に使うことはもちろん、各方面に貢献できるものである。

② 関山公園の整備 地域に貢献

創立以来一〇〇年、地域社会に支えられてきたことへの感謝の意を表明し、かつ「山を愛す」の精神で、地域に貢献することを目的に、木曾福島町の全面的ご支援を得て、関山公園の緑化・整備・利用促進の事業をおこなった。

関山公園修景整備事業記念式開催（平成十二年十一月五日）

参加者 木曾山林高校生徒・同職員、同PTA、蘇門会役員、

蘇門会福島支部及び郡内支部、木曾福島町役場（町

長、産業観光課長、議長、教育委員会）、区長会（山

平・上町・関町）、商工会長、上町商栄会長、報道

関係者 合計 約七〇名

内容 ・サクラや薬木の植樹、ネームプレートの設置

・講演「木曾は薬草の宝庫」長野県製薬 小谷宗司氏

立て看板の設置・他

平成十三年五月十一日、木曾福島町植樹祭が関山公園で行われた。その際、蘇門会役員と福島支部役員関係者で、平田利夫



写8-87 記念植樹を報じた信濃毎日新聞 (平成12年11月6日)

(44回)・安江伸二(56回) 寄贈による看板(公園整備の趣旨を記したものを)を設置した。

今後は、関山公園の森林整備(下刈り、つる切り、間伐、補植)、遊歩道整備、樹木のネームプレート設置及び差し替えなどをを行う予定である。

③ 牧尾ダム周辺整備事業への参画「山林百年の森」

一〇〇周年を記念し、お世話になった地域社会に貢献すべく、かつ本校及び「山を愛す」の精神を広く知っていただくため、牧尾ダム(水資源開発公団)周辺の公園化・緑化事業に本校も参画するものであった。

この事業は特に、二十一世紀の暮らしと美しい景観を守るた

め、山村と都市、上流と下流の人々が手を取り合って木曾川の水源地域に森づくりを進めるもので、これは本校建学の趣旨に合致するものである。

場所 愛知用水牧尾ダム(水資源開発公団・三岳村)
植栽事業

樹種 オオヤマザクラ、シラカバ、カエデ
種子の採取 ・木曾郡王滝村滝越

・学校演習林(生徒とOB)

植栽木の育苗(学校の苗畑とOBの提供する畑)

・オオヤマザクラ……実生苗(生徒が育苗)

・シラカバ・カエデ……山取苗

植樹

第一回植樹(平成十一年四月二十六日)

・参加者 学校生徒三〇名

郡内蘇門会各支部より約二〇名

水資源開発公団職員

・植栽木数

①オオヤマザクラ 三五本

②シラカバ 一一〇本

③カエデ・モミジ類 十五本

第二回植樹(平成十二年四月十九日)

三岳支部独自に実施

第三回植樹（平成十三年五月八日）

・参加者 学校生徒四四名

郡内蘇門会各支部より十五名

水資源公団職員十五名

・植栽木数 オオヤマザクラ 一〇〇本

・関山公園と同様に平田・安江から「山林百年の森」の看板の寄贈があり、設置した。

今後の予定

植栽後の管理を水資源開発公団と相談し、実施する。

故畑中静雄氏（45回）の提唱と尽力

この牧尾ダム周辺整備事業へ参画の提唱者は、坂下支部長であった故畑中静雄氏である。彼の、一〇〇周年を記念して山林高校らしい事業をやったかどうか、さらには事業が自分達のものばかりでなく、お世話になった地域の方々に貢献できるものが必要ではないか、との熱意から生まれたものである。

彼は水資源開発公団はじめ関係方面への働きかけ、さらに育苗や山取り苗の確保、植樹に必要な道具の準備などを進めた。

そして計画が認められると、これまた率先垂範、実行に移した。その準備はご自身だけでなく、家族ぐるみで献身的にやっていた。奥様はじめご子息、お孫さんまで水やりその他ご協力をしていたのだという。

しかし第一回の植樹が終わった平成十一年七月二六日、突然病魔に襲われ逝去された。事業半ばで逝った彼の無念さは想像に余りある。実行委員会でも突然の訃報に驚き、深い悲しみにくれた。そしてその遺志を継いだ。

それから二年、植樹されたオオヤマザクラ、シラカバなどの木々は青々と茂り、彼の熱い思いと共に、今大地に根づいている。まさに「山を愛す」の精神に生きた方であった。 合掌



写 8-88 後輩の生徒たちに植樹方法を熱心に説く、ありし日の畑中静雄氏（平成11年4月26日）

④ 創立一〇〇周年記念『蘇門会員名簿』の刊行

創立以来八千名を超える卒業生、在校生、旧・現職員の名簿が平成一〇年刊行された。

⑤ 教育環境整備（庭園整備）

本校の教育環境整備として、特に庭園整備をとりあげて目下計画で、近く実施の見込みである。

⑥ 国際交流基金の創設

二十一世紀の本校教育は、アジアを中心とした海外研修生・留学生を受け入れ、世界に貢献したいと考えた。そのための基金づくりの一部として予定している。

なお前述したように平成十三年度から、県の事業として海外研修生の受け入れが決まっている。

⑦ 創立一〇〇周年記念誌の刊行（後述）

⑧ 創立一〇〇周年記念式典の開催

平成十三年十月六日（土）午前一〇時より、木曾福島町民体育館で記念式典と記念講演、午後一時より本校旧体育館で祝賀会を開催する。

第七節 二十一世紀 世界の山林へ

一、原点を見つめ直して

本校を取り巻く状況は、前述の通り少子化、過疎化、生徒の多様化、産業としての林業の停滞、各産業の高度化・多様化等々であり、その存続すら危ぶまれているのが偽らざる事実である。開校以来最大の危機を迎えたといえよう。しかし、困難な時ほど本校教育の原点、林業・インテリア教育の原点を見直すべきであろう。

① 林業・インテリア教育の原点

前述したように私達人類の祖先は、森の木の上からおりて、この大地に立ち上がった時から、他の生物とは異なり、自然や森林を破壊することで、自分達の巨大かつ高度な文明をつくり上げてきた。しかし、これは自然、特に森林に依存しながら破壊するという大きな矛盾をもつものであり、人口増加によりその破壊は一層加速されてきた。人類はついに六〇億人を突破したという。

こうした中で、二〇〇年ほど前、森林破壊・木材不足の極致に至ったドイツの人々は、限られた小国ごとに森の再生、持続

をめざし、試行錯誤しながら森林経営の学問を大成した。これがドイツ林学であり、それは同時に近代的産業である林業の成立を促した。そのため多くの人々の雇用と生活を保障し、かつ同時に森林と共生する道を切り開いた。

わが国においても、森林の破壊は直接に人々の生活を脅かすものであった。なぜなら急傾斜地の多い国土は、台風、集中豪雨など自然災害が多く、人々はその恐ろしさをよく知っていた。一方豊かな水、清冽な水の供給源として山や森林は、神としてあがめられるほどであった。

かつまたそこから生産される木材は、家屋に使われるだけでなく世界有数の木の文化を生み出してきた。

二〇〇年前のドイツの人々と現代の私達が異なることがあるとすれば、それは、その思考対象が、ドイツ領邦国内から地球全体に広がっただけである。地球全体とはいっても、もはやそれとても私達にとっては限られた世界「宇宙船地球号」にすぎないのである。

とすれば、本校が一〇〇年にわたり森林・林業教育に携わり、生産された木材を加工し、さらにその加工素材を拡大しデザイン分野まで開拓してきた、その創造的な教育は、その輝きを増すことはあってもいささかもその意味を減じるものではないのである。

むしろこのことにより本校も、二一世紀は、この分野において木曾郡のみならず広く世界に貢献したいと考えるのである。

このような観点に立ち、本校のありようを次に述べる。

②林学は観察の学問 実験・実習を重視

遠く江戸時代、木曾の地に花開いた漢詩文学は、長崎在住の中国人を驚かしたほどのレベルであったという。その一方実生活に役立つ学問を忘れたわけではなかった。代官山村氏の作った学校「蓄我館^{せきわかん}」は実学の風を重んじた。

こうした中で本校は、一〇〇年前実業学校として生まれた。松田力熊初代校長の方針「林学は観察の学問」は、以後の本校教育を貫き、教室での授業のみならず現地見学、実験・実習を重んじた。

明治三六年四月、夜の明けきらぬ馬籠峠を松明を手を越えた若者たちがいた。本校の修学旅行隊であった。その壮観な姿は林業教育の夜明けつげるものであり、「林学は観察の学問」を実践するものであった。さらに実験・実習は、校歌に「左手に書とり右手には鋏を」と歌う通りであり、生徒の身につくこと、卒業後すぐ使えることを旨とした。

この方針は、戦前の木工専修科、戦後のインテリア科（木材工芸科、工芸科）でも全く同様であった。

こうした努力が、「山林の卒業生はできる」の高い評価を生んだ。

③ 師弟一体の人間教育

第二代校長江畑猷之允は、高等専門学校以上のレベルを要求した。それに対して師弟一体、教師も生徒も異常の努力を惜しまなかつたという。放課後遅くまで、そして休日返上で行われた測量実習にたいして、杭の原地区の人々からは「カラスの鳴かない日はあつても、山林の生徒が測量をしない日はない」と言われるほどであつたという。

今でも炭焼きの火を見ながら、生徒に徹夜で勉強を教える姿は、まさに教育の原点を思わせるものがある。

また校友会もそうであつた。生徒・教師・卒業生一体の組織となつて成功した。校内の各種行事をはじめ会報（『校友会報』『岐蘇林友』『蘇門会報』等）など、多方面に活躍した。

この伝統は戦後も生徒自治会、生徒会に受け継がれた。近年「日本一」と言われるようになったひのき祭も教師と生徒が一体となつて作り上げたものである。

さらに郡内・県内はもちろん遠く全国各地から来た生徒のための寄宿（望岳寮）は、時には校長自ら風呂を焚き、同じ釜の飯を食うなど、ここも師弟一体となつた人格陶冶、人間形成の場であつた。

こうしたことが卒業生の強い母校愛を生んだ。一〇年目ごとに行われる記念事業は母校の発展に大きく寄与するものであつた。

混迷を深める現在、将来を展望するとき、こうした原点を謙虚に見直すことが、新たな世紀を開くものと確信するのである。

④ 国立化運動と大学昇格運動

前述の通り、第二代校長江畑猷之允は、積極的な学校経営を行った。特に教育内容は高等専門学校以上のレベル向上を教師・生徒に要求した。

彼はその意図を『岐蘇校友』誌上で、次のように述べた。

要するに旧時の札幌農学校が北海道開拓創業と共に起り、拮据経営三十年間に多用の方面に実績を發揚し、その結果専念組織を最高学府に変更したるが如く、本学も内容の充実と実質の完美に念々不断の精進を以て、得意高潮の秋に遭遇せん事を期するあるのみ。

〔岐蘇校友〕11号

江畑校長の狙いは、本校教育の内容充実に努め、札幌農学校のように最高学府を目指すというものであつた。そして彼の方針は実践されていった。

さらに学外では松岡治三郎県議会議員を中心とする国立化運動がおこつた。当時の政情がからみ運動は挫折したが、その精神は受け継がれ、終戦直後の創立五〇周年記念事業は、将来の大学昇格を目指すものであつた。

昭和五四年、本校生徒をはじめ林業を学ぶ若者たちの、さらに高度な林業教育の場として、林業大学校が本校に隣接して開校した。

これも卒業生を中心とする関係者の強力な運動によって、創設されたものである。その根底にあるのは、母校及び林業教育の発展を願ったものであった。

こうした上級学校昇格運動が、本校教育とともに常に関係者の間にはあったのである。

一〇〇周年に当たり、改めて本校教育の二十一世紀を展望し、その発展を考える時、これらの運動は極めて重要な示唆を与えるものである。

二、木曾郡の学校である

一〇〇年前、木曾郡（当時、西筑摩郡）の人々は貧しい中から浄財を集め、本校を設立した。郡行政の果たした仕事の中で、明治以降最大の功績は「山林学校を作ったことだ」と言われたという。その先見の明と決断・実行力に改めて敬意を表するものである。

設立以来さまざまことがあった。しかし、平成十一年九月、ひのき祭実行委員会では、通学路を中心に住民アンケートを実施した。その中でずばり「山林高校は必要ですか」の問いに、九一・五パーセントの方々が「必要だ」と応えた。「必要でない」という人は一・二パーセントにすぎない。

その最大の理由は、林業を学ぶ学校の必要性であった。

本校は、一〇〇年前も今も木曾郡の学校である。この期待にしっかりと応える必要がある。

三、総合的森林及び木の文化の創造へ

戦後五〇年余における本校教育の特徴をあげるとすれば、林業科・インテリア科というように分化、さらに六コースに分れてきたことである。

今、改めてその原点に立ち返り、生徒個々の希望により種をまくことから、木を育て、森づくりをし、伐採、材木の生産、加工及びそのデザインまで幅広く学習できることは、極めて意義のあることである。すなわち各科・コースにかかわらず専門科目の選択範囲を増やすことが、そのことを実現しかつ中学生のニーズにも合うものであろう。

このようなことから平成十二年、課題研究（三年必須、二単位）において、林業・インテリア科の枠を外す試みが実現した。さらに次年度以降、一年生の農業基礎、工業基礎の相互乗り入れ、二年生の専門科目の自由選択を実現させることを念頭に検討が進められている。

そして前述のくくり募集が認められることになると、さらにこの面でも前進することになる。

四、職業高校から専門高校へ

平成七年、文部省は職業教育の活性化方策に関する調査研究会議の答申を受け、スペシャリストの育成をめざして、従来の職業科・職業高校を専門科・専門高校と、その名称を改めた。

当然本校もそのように呼ばれるわけであり、よりその専門性を高める必要がある。その意味で前述専門科目の科、コースを越えた選択幅の拡大は、個々の生徒のニーズに合わせるものである。即ち、より専門性を目指す生徒には、その選択が可能な教育課程の編成を目ざして目下検討が進められている。

本校は、開校以来一貫して、実験・実習を重視してきた。林学は観察の学問であり、必要な技術・技能は身につけるものであるという教育方針を貫いてきた。これは戦後開設された木材工芸科（現、インテリア科）においても全く同様である。

そしてこのことが単に修得にとどまらず、生徒の人格を磨き、人間形成に大きな効果を発揮したことは、今まで本誌が述べてきた通りである。

五、地域との連携

昭和四年開設の木工専修科、そして戦後設置の木材工芸科は工芸科、インテリア科と変ったが、毎年恒例の生徒作品展に多くの人々がつめかけ、その技術水準の高さに驚嘆している。イ

ンテリア教育の大きな成果である。

平成八年に始められた、林業科の生徒たちによる親林教室は、地域の方々を本校演習林に招き、生徒の指導により林業体験をしていただくもので、画期的なものである。

さらに演習林を整備し、遊歩道を設置し、一部植物園などにして、地元町民の皆さんの憩いの場として開放することも考えられる。なぜなら演習林の大部分は、もとはといえば木曽福島町の人々のものであったし、森林の大切さを知っていたくには好都合であろう。

さらに、本校では開放講座としてしばしばパソコン講座を開設している。現在ではインテリア科で行われているが、町民の方々に好評である。さらに本校の特性を生かした開放講座が必要であろう。

また本記念誌を編集するに当たり、多くの林業関係の文献が本校に寄せられた。以前から所蔵するものと併せて整理し、多くの方々の利用に供することは本校の使命であろう。地域の文化センターとしてのみならず、日本の林業教育の情報センターとしても本校に課せられた仕事である。

こうして見ると本校は生涯学習にも有効に役立つことができるであろう。

一方、かつて御料林を自らの教室と仰いだ卒業生たちが多くいる。国有林と名称はかわっても、その存在は今も同じである。木曽の国有林が本校の教室である。そして、木曽の人々が営々

と作り上げてきた地場産業、檜川村の漆器、木祖村のお六櫛、画材、上松町の割り箸、桶、南木曾町のろくろ細工等々も新たな教室としてもよいであろう。山を支えてきた人々の村おこし、町おこしも生きた教材である。

六、日本中から木曾へ、そして全国各地へ

現在、全国に林業科を持つ高校は、二十数校にすぎないという。林業科は全国的に学科改編が進み、廃科した高校さえある。

最近の長野県内にかぎれば、上伊那農業高校が緑地工学科に、白田高校で環境緑地科に改編され、下伊那農業高校の林業科は廃科となった。したがって林業科のある高校は、県内では本校と下高井農林高校の二校にすぎないのである。

また、「二十一世紀はインテリアの時代」といわれる。こうした中で、本校がその原点を振り返り、地域と連携し、林業・インテリア教育の改革に努め、全国に類のない学校として歩むなら、再び日本中から生徒が集まり、全国各地へ羽ばたいて行くことも夢ではないのである。

七、世界各地から、そして羽ばたけ

世界を見つめた生徒たち

平成九年三月、本校から初めて海外での林業体験ボランティア

アに生徒・職員が参加した。参加生徒の一人伊藤絵美は、初めてみたフィリッピンのヌエバビスカヤ州の赤肌のはげ山を見て、「あまりにもむごい」と驚きの声をあげ、故郷木曾の山々の豊かな森林に思いをはせたという。そして「いつか必ず、隠れんぼができる森にしたい」と、農業クラブの意見発表会の壇上で述べた。

こうした海外研修やその報告を通じて本校生徒たちも世界の状況に目を向けるようになった。

ネパールからの研修生

同年初、ネパールのトリスリ村から林業研修生としてヤシヨダ・タパ氏が来校した。彼女は、現地では日本のNGOカトマンドウの援助で行われている植林センターの教官の一人である。さらに翌十年の秋にも二カ月ほど本校で研修をした。

研修内容は、日本語及び間伐・枝打ちなどの森林の管理技術が主で、さらにインテリア科で木材加工なども学んだ。

同NGO事務局長の安倍泰夫氏は、かつて本校で講演したことがあり、その縁で本校での研修が実現したものである。

氏によれば、いくら林業教育をして現地に送り込んでも無駄で、まず現地の人々が働く場所、植林センターをつくり、そして研修に招いたのだという。登山家でもある氏はヒマラヤへ行く度にネパールの山々の木が切られ、はげ山になった山々に心を痛められたという。多くのボランティアの人々と共に、その

援助と指導に当たられた安倍氏らNGOの皆さん、ヤシヨダ氏ら現地スタッフの献身的な努力が実り、三〇万本植えた内、十七万本が根付き、大きな木は高さ二〇メートル、胸高直径二〇センチになるという。

平成十二年(二〇〇〇)秋、やはり同植林センターの教官ランバム氏が来校し同じく二カ月間の研修をした。ランバム氏の場合は、大きくなった木の利用方法についての研修が中心になっていた。そのため本校研修の合間を縫って郡内各地の木工産業の視察が行われた。



写8-89 美術部員を中心にして作られた「山林かるた」を贈られたヤシヨダ・タバ氏。第1回訪日の際の送別会にて(平成9年11月)

植林と村づくり

世界の森林資源減少の大きな原因に、日本など先進国の商業伐採があげられるが、その背後には熱帯林を切らざるを得ない貧困が横たわっている。アフリカには一日の薪を手に入れるために一日中歩き回る人々もいるという。貧困問題を抜きには植林はあり得ない国々が多いことは、ジャック・ウエストビーの指摘する通りである。

事実、JICAの方々の中には、植林をするために、まず村づくりから始められたという方々もいる。



写8-90 ログソール操作の練習をするランバム氏(平成12年10月27日) (高島顕教諭蔵)

こうした世界で、もちろん本校卒業生の中にも、海外での植林・林業指導活動に従事された方々もいることは、誇りとするところである。

木曾郡の人々と共に世界に向かって

今世界では、森林の再生・持続をはかり、木の文化と産業を起すこと、木を植えた人々が幸福になることができる道をさぐる必要があるとされている。

このような分野で本校が一〇〇年にわたって培ってきた教育。加えて、それ以上に長い時間をかけて村づくり町づくりを、そして木の文化と産業を作り上げてきた木曾郡の人々。

本校の教育と木曾郡の皆さんとが連携し、学校教育という形で全世界に公開できないか、と考えるのである。その実現こそが本校の担うべき役割であり、二十一世紀の本校のあり方である。

本年一月、田中康夫長野県知事は、全校生徒を前に東南アジアからの研修生の受け入れを表明した。今まさにその一歩が踏み出されようとしているのである。

「山を愛す」は平和の架け橋、森はともに生きる場

世界各国の若者たちが、本校演習林で共に汗を流しながら地球の緑や人類の未来について語る日があることを、インテリヤ科の工具や絵筆を手に国々の生活や文化の様子を語り合ったり

する時が、必ず来るのである。

時には教室を学校から国有林に、村や町の公民館に、木工所に移し、日本と各国の人々が共に学ぶことができれば、日本の若者にも大きな影響を与えるであろう。

本校一〇〇年を貫いた「山を愛す」の精神は、世界の人々をつなぐ平和の架け橋であり、森はともに生きる場である。木曾の山霊に育まれた人々が地球の緑化と創造的な文化・産業の発展に活躍する日が来ることを確信するのである。

二十一世紀の本校は木曾郡の人々と共に、世界に対して名誉ある貢献をしたいと考えるのである。

(終)

●コラム 現代詩

林業の学び舎

やまもと あつし

若き人生の心を惹き寄せ

渦まく麗しき人間性

泡立つ夢の数々は

夢呼ぶ影像に生命傾け

眼に見えぬ糸の招き

力強き昂然の心境

扉を開き浮きたたず

氣勢が上がる林業技術

氣勢があがる傳統の輝き

胸を突く名声面目施す

憧れの木曾山林の学び舎

憧れの木曾山林の誇り

跳ね上る前途の幸せ求め

木曾の五木は青く繁りて

燃え立ち呼ぶ道

美しき溪谷に夢の数々

心は躍り弾け輝かす

押し寄せる無限の未来

英知の結集衆望を担う

よき人生に肩と肩抱く

世人の一目置く所

手を携えて天下に名をなす

憧れの木曾山林に溢れ

憧れの木曾山林を讃えん

山本阜司 (25回) 平成七年七月逝去